
春空カノン

日々野 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春空カノン

【Nコード】

N2690C

【作者名】

日々野 凜

【あらすじ】

透子と聡太は血の繋がらない姉弟。微妙なバランスを保ってきた二人の関係は、聡太が同じ高校に入学したことで大きく揺れ始めて

……

【前奏曲】

ト音記号、五線譜。

聡太そうたより先に覚えた。九九も、二十跳びも

あたしはお姉ちゃんなんだから。

聡太より先に出来なくちゃいけない。

そう繰り返しながら、いつもいつも、

あたしは胸の中にはら撒かれたおはじきを一つずつ弾く。

……きれいになくなるまで、あたしはこれからも

きゅうきゅうきゅうきゅうだ。

【第一楽章】 入学式

『 誓いの言葉。 新入生代表、さきみやそうた 咲宮聡太 』

「はい」と返事をして、体育館の壇上に真新しい黒のブレザー姿の少年が上がっていく。

ぴしっと伸びた背中、鼻筋の通った横顔。

歩調はゆっくりと、落ち着いて。

中央まで来ると、少年は居並ぶ全校生徒に向かって丁寧に頭を下げた。

「うわ、背え高つ。しかもイケメン！ほんとにアレ、弟？」

前に座る生徒たちの間から首をひよこひよこ覗かせながら、隣りに座る美香が小さく声を弾ませた。

紅白幕の前に立っている学年主任の目がきらりと光ったのをあたしは見た気がした。

二年生であるあたしたちの席は、三年生の後で一番後ろ。

左手にある体育館の入り口付近に、警備員みたいに立ち並ぶ先生たちからは目立つのだ。

しーっと口に指を当てて、そわそわし出した美香をあたしは落ち着かせた。

『 桜の花も枝をにぎわせ、吹く風の暖かさを感じられるこの良き日に 』

式辞を読み上げる聡太の声が心地よく体育館に響く。

声変わりは済んだけど、聡太の声はあまり変わらなかった。低す

きず高すぎず、時々笑うと掠れるのがあたしは好きだった。

とうとう、聡太も高校生か。

壇上の聡太の背中を、あたしは遠くから眺めた。

たった一つの年の差は、簡単に埋まってしまう。
卒業で引き離しても、またこうして次の春が来れば。

「ねえ、ちゃんと紹介してよお？ でもほんつとに透子いとこの弟？」

顔を寄せて、美香が訊いてくる。

ふわりと甘い香りが鼻を掠めた。また香水を変えたらしい。

- - 悪かったわね。

どうせあたしは十人並みの顔だよ。

髪も真つ黒ボブだし、色白でも細身でもないし、いたって標準のお手本よ。

「親が再婚して出来た弟だもん、似てるわけないでしょ」

「ああ、そっか。ていうか、入試満点だったってスゴくない？ ほんとに紹介してよね」

美香は頭のいい男が好き。

前に付き合ってた他校の何人かもそうだった。でも本人の学力にはいっこうに影響なし。

わかったよ、とあたしは早口で言っつて美香を押し戻した。
学年主任、滝井の目がこっちに注がれているのがわかる。

何しろ、同じクラスでもないのに美香はあたしの隣りに堂々と座っているのだ。

ただでさえ、美香は服装検査で毎回滝井に目をつけられてるのに。

違反常習者をつけているという“滝井リスト”と一緒に載せられたくない。

タコみたいに口をすぼめて、美香はマイクロミニばりの短いスカートからのぞく小麦色の足を組んだ。

隣りのクラスの男子生徒の視線が、ちらりと動いた。

『 新入生代表、咲宮聡太』

完璧に役目を終えて、聡太は壇上を下りていく。足音が、静寂に包まれた体育館にかすかに響く。

そうしてまた、距離は縮まるんだ。

大丈夫　まだ、メトロノームは同じリズムのまま。

そつと深呼吸して、あたしは体育館の天井を見上げた。

陽射しが降り注ぐ天窓の向うには、目が眩みそうなほどの青空が広がっていた。

* * *

入学式が終わった後、あたしたちは教室に戻った。

去年同じクラスで仲良くなった美香とは、今年は離れてしまった。でも隣りのクラスなので、あたしはB組の前で美香を見送ってC組のドアを開けた。

中に入ったと同時に見つけたものに、あたしは啞然としてしまった。

窓際から四列目の真ん中、あたしの隣りの机に突っ伏してぐーすかと田崎くんが寝ていたのだ。

入学式の間に来たんだろう。

今朝はサッカー部は朝練はしてなかったようだったから、寝坊したんだな、きつと。

いいご身分で。

クラスの皆ががやがや入って来たけど、田崎くんは起き上がる気配がない。

ようし、起こしてやろう。

自分の席の方から回りこみあたしは田崎くんの耳元に口を近づけた。

そしてふつと息を吹きかけてやると。

「…………ぬあつ!!?」

階段を踏み外した夢を見た時みたいにかたがたーと机ごと身体を跳ね上げて、田崎くんが顔を上げた。

「び…………つくりした。咲宮かあ」

地味なイタズラに、いいリアクションありがとう。

あたしの顔を見てほっとしたような表情をしたその頬には、下敷きになっていたパンの空袋の跡がしっかり残っている。

短髪の頭を掻いて両手を上に伸ばし、田崎くんは大きなあくびをした。

「終わったんだ、入学式。どーだった？」

「何事もなく。なんか懐かしかったよ、去年はあんな風に緊張してたのかなりって。でも滝井の目が怖かった。田崎くんいないからって、美香がどっかり隣に座るし。いいわねー、優雅に一人でご朝食？」

「昨夜サッカー見てたら寝るの遅くなってさ。ま、昨日の始業式は遅れなかったから、仕方ないよな」

……何が仕方ない？

メロンパンと書かれた袋をくしゃくしゃと丸めて机の中に押し込むと、田崎くんはもう一度大あくびをした。

田崎くんとあたしと美香は去年同じクラスだった。

席が近かったから自然と仲良くなって、よく三人でいるようになった。

「卒業式の時もそんな理由で寝坊したよね。それでよくサッカー部の朝練には出られるね」

「起きられないのわかってるんだけどさ、見ちゃうんだよね。でも練習は起きられるんだ、キャプテン怖いから」

180という長身に似合わないのんびりとした口調で田崎くんが笑う。

長い両手足は、伸ばすと前後ろの席を超えてしまいそうだ。

田崎くんのポジションはゴールキーパー。

サッカー部では「鉄壁の守護神」なんて呼ばれているそうだ。

普段はのんびりなのに、ゴール前に立たせると豹変するらしい。

でもその守りのおかげか、うちの高校は去年県大会で初優勝を果たしたのだ。

美香は田崎くんのことをコアラみたいだって言う。

寝てるか食べてるかサッカーしてるかが、彼の主な行動パターンだから。

でもそんなマイペースさ加減が、あたしは好きだったりする。

「ああ、よくペナルティだって購買のパン買いに行かされてたよね。けどよかった、田崎くんが一緒で。美香とも離れちゃったし、合唱部の友達もいないし心細かったんだよね。こちらこそ、また一年よろしく」

一年の時同じクラスだった子は何人かいるけど、ほとんど喋ったことがない子ばかりだった。

美香はすぐに回りに馴染めるタイプだけど、あたしは新しい環境ってというのがどうも苦手だ。

「あいよゝ喜んで。あゝダメだ、眠い！ もうちつと寝るから、先生来たら起こして」

でっかいティンベアが前のめりに倒れたみたいに、田崎くんはまた机に伏せてしまった。

確かに美香の言う通りかもしれない。

でもこれでも田崎くんて、案外女子に人気があるんだよね。

「あ、も一つあったわ。遅刻の理由」

動かなくなっただと思っただら、急に田崎くんが顔を上げた。

そして窓の方を見る。つられてあたしも目を向けた。

「桜が、きれいだったんだよね。あっちこっち」

窓のすぐ外で枝を張る淡雪のような桜の花を田崎くんが指差す。

「また春が来たなーと思って、しみじみ見上げてた」

そうだよ、と言うように集まって咲く小さな花が微風に揺れた。

今年は桜の開花が遅くて、四月の一週目を過ぎてやっと満開になった。そういえば家の近くの公園もきれいだっただな、と思い出す。

桜は始まりと終わりを告げる花。

そう言ったのは誰だっただろう。

「……そうだね、一年て早いね」

薄紅色のさざめきを眺めながら、あたしは頷いた。

華やかに咲いて儂く散っていく花が、また新しい季節を運んでくる。

今年はどうな日々が待っているのだろう。

青空の下眩しいほど輝いて、春のぬくもりに包まれた花びらは、

はらはらと零れ落ち始めていた。

【第二楽章】 ピアノ

メゾピアノからクレッシェンドへ。なめらかに、流れるように。

鍵盤の上を滑る指が、音色を奏でていく。

何も考えなくても、ほら、自然に。

あたしはメロディに包まれて、一体になっていく。

合唱部の練習のない昼休みに、裏校舎の三階の角にある音楽準備室でピアノを弾くのが、あたしは好きだった。

この校舎には美術室などの特別教室の他は物置部屋しかないから、誰にも邪魔されることはない。

中盤は盛り上げて、強弱の差でメリハリをつけて惹き付ける。

準備室といっても教室一つ分くらいの大きさはあり、音はよく響く。

聴衆が周りにいるような気分で、あたしは自分の演奏に酔い痴れることができる。

ここのピアノは色もはげかけて古くて、時々気の抜けた音が出たり鳴らない鍵盤があったりするけど、弾き始めてノってくればそんなのはどうでもよくなる。

ああ、気分いいな。

陽射しがあつたかい。

すぐ横の窓からは中庭が見える。校庭と同じで、中庭も桜が満開で春爛漫。

開けた窓の外、手を伸ばせば届く距離にある眩しい花を一瞥して、あたしは目を閉じた。

「お、いたいた咲ちゃん」

気分が音に乗って飛び立とうとしていたその時、突然準備室のドアが開いた。

あたしの手は思わず止まる。

入って来たのは、合唱部の女子部部长で三年生の結理先輩ゆいだった。

「あ、邪魔しちゃったね」

赤縁メガネが印象的な、すらりと背の高い結理先輩は「ごめん、ごめん」と謝りながらドアを閉めた。

「あれ、今日……昼練はないですよね？」

間違つたかな、とあたしは首を傾げた。

「うん、そうなんだけど、渡す物があつて。咲ちゃんいつもここで練習してるって言ってたから」

天使の輪の浮かぶストレートロングを両耳にかけて、結理先輩は脇に抱えていた薄いファイルをあたしに差し出した。

きれいな髪だなあ、柔らかそう。先輩を見るたびにあたしはいつも思う。

「ほい、これ次の課題曲」

ファイルを受け取って開くと、中に合唱曲の伴奏用の楽譜が入っていた。

『遠い日の歌』の楽譜だった。

「咲ちゃん伴奏者だし、先に練習したいかなと思って。簡単だからすぐ弾けちゃうとは思っけど」

ピアノの隣に置いてある机の表面をささっと手で払うと、結理先輩はその上に座った。

「カノン、をモチーフにしてる曲ですよ。パツヘルベルの。……中学の時に合唱コンクールで使いました」

その時もあたしは伴奏だった。でも、一番思い出したいくない思い出。あ、ほんと？　じゃあもう弾けたりする？　練習、明後日くらいから始めようかなと思うんだけど」

先輩の顔色が明るくなる。慌ててあたしは付け加えた。

「あーでも、ちょっと練習しないと……苦手なんです、これ。昔、本番で失敗しちゃって」

「えー、咲ちゃんでも失敗するんだ？　いつもすらすらすらと弾いちゃうのに。さす

がピアノ歴十年！　て皆感心してるよ」

「失敗くらいしますって。でもあの日は本当に大失敗で。それからちょっとトラウマなんです」

中学三年の合唱コンクール。うちのクラスは優勝候補で、皆やる気満々だった。あたしも意気揚揚とピアノの前に座った。

「なにになに、らしくないよー！　君なら出来る！　大人になった！

ていうか、うち咲ちゃんしかまともに伴奏出来る子いないんだからね。いつものおまかせ咲ちゃんに頼むぜ！」

思い出して沈みかけたあたしの背中を、結理先輩がばん、と叩いた。

痛いっす。

見た目は知的なお嬢様系なのに、結理先輩って結構男勝りなんだよね。

お兄さんが三人いるせいでこうなったって、本人は言っている。

「でも、もう一人伴奏欲しいよね。そうすれば咲ちゃんも楽になるだろうし。家だと練習できないんでしょ？」

「夜は、お母さんがいい顔しないんで」

「よし、新入生から一人ピックアップしよう！ あ、そういえば咲ちゃんの弟もピアノやってたんじゃなかったっけ？ 誰か言ってたぞ」

赤縁めがねの奥で、結理先輩の目がきらりと光る。

あたしはどきっとした。

きつと裕子が話したんだ。あの子はあたしと聡太と同じ中学だった。

「見たよ、新入生代表挨拶。優秀だね。うちみたいな市立じゃなくて、もつと上の進学校狙えたんじゃない？ あ、もしかして咲ちゃんと一緒にいたかったとか！ シスコンだな？」

にや、と結理先輩がいたずらっぽく笑う。先輩はうわさ好き。

「やめてくださいよー！ キモいから」

広められたらまずいから、あたしは大げさに首も両手も横に振っ

て否定した。

「県立は詰襟が嫌だ、って前に言ってたんで、そのせいじゃないかな」

「ええ？ なんじゃその理由」

「変でしょう。あいつ、でかく育ったわりに小さいことにこだわりますよ。ピアノも「離れた和音を掴める成功率が低すぎる」って急にやめちゃったんです」

「なにそれー、変！」

結理先輩がけらけら笑う。

「でしょう、とあたしも合わせながら、早くこの話はやめたいと思った。」

なんだか気が滅入る。

小さい頃、透き通ったメロンソーダにアイスが溶けて白く濁ってしまった時に感じた気持ちみたいに。どんなに欲しくても、あたしはそれが嫌でクリームソーダは頼まなくなった。

「だから、聡太はだめだと思います。運動部にでも……入るんじゃないかな」

嘘だ。憶測にすぎない。

もう一人のあたしが口を出す。

胸の中にあるおはじきが、ピンと弾かれる。

命中したもう一つの声はふっと掻き消えた。

あたしは両手を鍵盤の上に置き、右足をペダルに載せた。

「残念、だめか。姉弟連弾なんて面白そうだと思ったのに」

結理先輩がちえ、と指を鳴らした。

連弾で伴奏？ 聞いたことないよ。

あたしはもう一度、さっきの曲を弾き始めた。

『あたしの後に続いて弾くんだよ。かえるの歌みたいに』

ふいに昔のことが脳裏を過ぎった。

あたしは息を吸って吐き出すと同時に、かたいペダルをぐっと踏んだ。

「この曲聴いたことある。なんていうんだっけ」

曲に合わせて、結理先輩が身体を左右に揺らし始める。
リズムをとるその様子を横目で見ながら、あたしは答えた。

「ランゲの『花の歌』。好きなんです、この曲」

「春っぽいね。やわらかい咲ちゃんの弾き方に合ってる」
メトロノームみたいに、先輩が揺れる。

その速度に合わせて、あたしはテンポを緩めた。

ラララ、と口ずさむ声が、やがてメロディと調和していく。

穏やかな時の訪れに、あたしは目を閉じた。

開いた窓から忍び込んできた風が、ふわりとあたしたちを包んだ。

【第三楽章】 姉弟

玄関のドアを開けた途端、夕飯のにおいがふわりと奥から漂ってきた。

そのおいで、あたしはやっぱりな、と自分の感覚を誉めたくなつた。

家に着く前から今日の夕飯の予想はついていた。

「ただいま」

家になると階段横のキッチンのドアを開けて、いつものようにあたしは中へ呼びかける。コンロの上で香ばしい音をたてている中華なべがまず目についた。

「あ、おかえり」

白地に大きなピンクの百合柄のエプロンをつけたママが鍋の前で振り返った。

シンクの横には開いたパイナップルの缶詰。

ほら、やっぱり今夜は酢豚だ。

我が家のメニューは二週間のローテーションで回っている。

今日は酢豚の日、ちなみに明日は野菜炒めだと思つても時々入れ替わりが起きるから、断定は出来ない。

「もうすぐごはんだから、着替えておいてよ」

長い巻き髪を後ろで一本に結わえ、専業主婦なのにはっちりメイ

クしたママは、一瞬あたしに微笑んで料理に戻った。

もとホステスのママは、いつもおしゃれに余念がない。

家から一步も出ないときでもお化粧は忘れない。

キッチンを開けるといつも、あたしはどこかのスナックかクラブにでも行ったような気分になる。

はい、と返事をしてドアを閉めると、あたしは二階への階段を上った。

そして奥の自分の部屋へ入ろうとした時、足音に気付いたらしい聡太が手前の部屋から顔を出した。

「おかえり」

黒のカットソーにジャージ姿で聡太は廊下に出てきた。

あとちよつとで頭がドア枠にこすりそう。

十五歳で身長一七七センチなんて、ほんとによく育ったもんだ。ママはあたしと同じくらいだから、聡太の本当のお父さんはきつと大きな人だったんだろう。

「ただいま。ちゃんと頑張ってたじゃん、代表挨拶。美香があんたのこと、かつこいいって言ってたよ。ほら、あたしがよく話している子。緊張した？」

「うーん……フツ！。用意された紙、読むだけだったし」

けだるそうな声で答えて、聡太はあくびをした。

愛想悪。

髪ばさばさだし、昼寝してたんだな。今日は新入生は半日で終わりだったから。

普段からそんなに愛想はよくないけど、寝起きの聡太は余計無愛想だ。低い声でぼそぼそとしゃべる。

ママ似のきれいな顔立ちしてるのに、その活用法をわかってない。

ブスとも言われないけど美人とも言われないあたしから見たら、贅沢な奴！って思う。

「遅かったね、部活だったの？」

クラスはどうだった、と聞こうとしたのに先に聡太が質問してきた。

「うん、そう。コンクールの練習がそろそろ始まるんだ」

あたしはママが誕生日に買ってくれた腕時計を見た。

六時四十五分。今日はミーティングもあつたから、いつもより少し遅くなった。

それでも六時前には出たんだけど、ちょうどいい電車がなかったんだ。

学校から家の最寄駅まではたった二駅だけど、ローカル線は夕方でも本数が少ない。

「透子はピアノなんだよな。歌わないの？」

「……うん、あたしは伴奏専門だから」

「それ、何の曲？」

「え？」

あたしの抱えているファイルを聡太が指差した。

「それ、楽譜でしょ？」

聡太の、きれいな二重を描く瞳があたしをじつと見つめてくる。視線をさまよわせて、あたしは自分の腕の中を見下ろした。

「……『遠い日の歌』。知ってるでしょ」

「ああ」と、ちょっと間を置いて聡太が言った。

「カノンだ。なつかしいね」

あたしはぎゅっと楽譜を抱きしめた。

「うん」

二年前の合唱コンクール。

あたしは中三で、聡太は二年。

あたしたちのクラスは同じ自由曲だった。二人とも、伴奏者だった。

「ねえ、部活の勧誘はもうされた？」

沈黙になってしまいそうだったので、あたしは話題を変えた。

「……ううん、今日はなかった」

「入るとこ決めてるの？」

「まだ、考えてないけど……」

めんどくさい、と言いたそうな渋い顔で焦げ茶の髪を掻き回して、聡太は壁に長身を預けた。

うちの高校は部活動が盛んで、一年生はたいていどこかの部に所属する。

「聡太、運動神経いいじゃない。ムダに背だけ高いんだから、バスケットでもやったら？」

「ムダ、とか言うなよ。……チビ透子」

「チビじゃない！ フツーだよ、一五五センチはあるもん」

「オレから見たらチビだよ、チビ」

「ちよつとー、それがお姉さまに向かって言う言葉？」

わざと怒ったふりをして睨んでやると、聡太はちよつと口をへの字に曲げた。

気に入らないことがあると聡太はすぐちよつとやって口を曲げるクセがある。

でもこういう顔もなんだか絵になってて、携帯で撮ってやりたくなるんだよね。

中学の時はよく、後輩から聡太の隠し撮りを頼まれたものだった。「あんまり興味ないんだよなあ、部活」

そのくせ本人は女の子に騒がれるのなんてどうでもいいみたいだ

った。

聡太に好きな子がいるなんていう話は一度も聞いたことがない。

「ダメだよ、新しい環境なんだから積極的にいかなきゃ。友達も出来るし楽しいよ。せつかく受験が終わって塾から解放されたんだし……あ、サッカー部は！？うちのクラスの田崎くんもいるよ」

「いいよ」

興味のなさそうな様子で聡太はあたしの言葉を遮った。

「それより、オレは」

「ごはんよーっ！二人とも、早く降りてきなさいよ！」

一階からママの声が聞こえた。

「やば、早く着替えなきゃ！先行きな、聡太。今日はごちそうかもよ」

「ないない。わかってるだろ？」

聡太がくん、と鼻を鳴らす。

あたしたちは同時にちよっと苦笑した。

「とにかく早く降りたほうがいいよ。いつも遅いって叱られてるんだから」

聡太を促して、あたしは自分の部屋のドアを開けた。

「あ、透子」

中に入ろうとした時、呼ばれてあたしは振り向いた。

「なに？」

「明日、昼飯一緒に食っていい？」

「なんで？クラスの子と食べなよ、友達作んなきゃ」

「言ったじゃん、受かったら特別に学校案内してやるって」

「あー……」

そう言えばそんなこと言ったかも。
まったく、よく覚えてるやつ。

「いいよ、わかった。でも明日だけだからね！　ブラコンとか
言われたら最悪だし」
そう言っただけはドアを閉めた。

閉めたドアに寄りかかって、鞆を床に落とす。

溜め息が漏れた。

『それより、オレは』

さっきの言葉、何を言おうとしたんだろう。

腕の中のファイルをあたしは見つめた。

今日も少し練習した『遠い日の歌』のメロディが、頭の中を流れ
始める。

勘はすぐに戻ってきた。

指が、覚えていた。

だって　カノンは、あたしの一番好きな曲なんだから。

あの日、聡太のクラスはあたしたちより先に発表だった。
聡太は完璧に弾いた。
だからあたしは、滅多にあがらないのに、すごく緊張したんだ
だけど。

頭の中が真っ白になった。

思い出そうとしても出来なかった。

いつも自然に聞こえてくるはずのメトロノームの音は、まったく
響いてこなかった。

あの日から、あたしはカノンを弾かなくなった。

そして聡太は、ピアノをやめた。

*
*
*

夕飯はやっぱり酢豚だった。
だけど今日はそれに、ポテトサラダと生野菜サラダのおまけがつ

いてる。

きつと今日が聡太の入学式だったから……なんだろうな。

「ケーキも買ってあるからね。あんたの好きなチーズケーキ。夕飯の後でみんなで食べましょ」

ママがみそ汁とごはんをよそってくれて、三人で夕食はスタートする。

大手電気メーカーのエンジニアであるお父さんは、帰りはいつも九時すぎだ。だから一人で食べる。

その時はいつもママは、隣でワインで晩酌をしながら話し相手をしている。

「ね、味どう？」

食べ始めるやいなや、ママが期待を込めた眼差しで聡太に訊く。マスカラをばっちりつけた大きな目は、まるで女子高生みたい。

三十七歳とは思えない。

「今日のはちよつと甘い」

酢豚をごはんの上に載せ一緒に口に放り込みながら、聡太が言う。本人曰く、酢豚はママの一番の自信作だ。

「えーっ、そお？ 味見したわよ、ちゃんと。透子は？」

きたきた。

つつき箸をしてためらっていたあたしは、酢豚の具を箸で掴まえて急いで口に入れた。

しまった、パイナップルも取っちゃった。

「あたしはいつも通り、おいしいと思うけど」

じゅわつとパイナップルと果肉に凝縮されていたシロップの味が口の中に染み出した。

同時に酸っぱいような甘いようなソースの味も混ぜりこむ。

その微妙な調和をあたしはぐつと飲み込んだ。

……やっぱり、まずい。

「オレ、たまにはシチューとか食いたい」

聡太があたしを素早く一瞥した。

「ええ？ だってあんた、牛乳の味がするからやだって言ってたじゃないの」

ママが呆れた声を出す。

「……そうだけど。たまには食いたくなる時もあるの」

少し肩をすくめて、聡太はサラダを食べ始めた。

……シチューはあたしの好きなもの。

だけどママは作らない。

ママの作るものは、ほとんど聡太が好きなものだ。

「透子、肉ちょうだい」

突然聡太があたしの酢豚の皿に箸を伸ばしてきた。

そしてあたしの苦手な脂身の多い肉をひよひよいと拾っていく。ついでにパイナップルも。

「ちよつと、お行儀悪いからやめなさいって言うてるでしょ。おかわりならあるわよ」

「いい。父さんの分なくなっちゃうから」

時々聡太はこうやって、さりげなくあたしを助けてくれる。

食事だけじゃなく、他の場面でも。

ママもお父さんもきつと気付いていない。

でも、聡太にはわかってるんだ。

あたしが時々、この家で、疎外感を感じていることを

「あーあ、なんかワイン飲みたくなっちゃった。今日も洋次さん遅いのかしら」

テーブルに頬杖をついて、ママは上目遣いに壁の時計を見て溜め息をついた。

規則正しい秒針の音が、急に耳にまとわりついてくる。

「ごちそうさま」

自分の分の食器を集めて聡太が立ち上がった。

肉とパイナップルが抜けて殺風景になった酢豚の皿に、あたしは再び箸を伸ばした。

【第四楽章】 バランス

5、4、3、2、1

指の間でシャーペンをクルクル回しながら、田崎くんが小声でカウントを始める。

ゼロ、と同時に授業終了のチャイムが鳴った。

田崎くん、会心の笑み。

「じゃあ明日は六番から当てるからな。予習しとけよ。今日はこれで終わり」

数学の滝井がぶつきらぼうな低い声で黒板から振り返る。

でも怒っているわけじゃなくて、これが奴の素なのだ。

教室の張り詰めていた空気がほ、と息をついた時のように緩んだ。日直の号令で挨拶をして、一日で最も長く感じる四限目が終わった。

お昼だ。

「咲く、あとでノート見して」

机の中からパンの袋を取り出しながら、あくび交じりに田崎くんが言った。

あんぱんにジャムサンドにメロンパン。

……甘党だ。

「え？ なんで？ だって起きてたじゃない。ノートとってないの

「？」

あたしは思わず頭を乗り出す。

すると田崎くんは机の上に開いてあったノートを見せてきた。風船みたいな頭でっかちのキャラクターが書いてある。

……たぶん、ドラえもんだろう。

「途中でちよつと考え事しちゃってさ。今更だけど、なんで3x3は9なんだろうとか思っただ疑問を解こうとしてたら、答え消されちゃって。滝井ってどんだん先に行くじゃん」

いやいや、付いて来なさいよアナタ。

呆れた……。

絵の下手さ加減にもだけど、ちよつとズレてるそのテンポに。

でも呆れ半分、それも田崎くんらしくてあたしは笑ってしまう。

「ヘンな人だね、田崎くんて。キーパーの瞬発力はどこいっちゃったのよ。大丈夫？ 今週中にあたしたち問題当たるよ」

あたしがノートを投げてやると、田崎くんは両手で挟んでキャッチしてそのままあたしを拝むように頭を下げた。

滝井は出席番号順に問題を当てる。

答えられないと、答えるまで黒板の前に立たせる。

教室の沈黙を背負って答えを探すのは、かなりのプレッシャーだ。「あたしたちは15番だから、たぶん明々後日だね。それまでに返してね」

「サンキュー、咲ちゃん！ 今日美人っ」

調子いいんだから。

でかい図体のわりに、田崎くんは犬みたいに人懐こいところがある。

憎めないキャラなんだよなあ。

「ねーねー、鈴木とメシ食うの？」

教科書をしまい立ち上がったあたしを、田崎くんがあんぱんを頬張りながら見上げてくる。

鈴木、は美香の苗字だ。

「うっん、今日美香休みなんだよね。三限の終わりにメールが来た」理由は「あと一回遅刻したら罰そうじだから、だったら休む」だ。

あたしの友達って、遅刻魔ばかりだな。

「どこで食べるの？」

「いつもの裏校舎の音楽準備室。ピアノ弾けるし」

「ふーん。なら聴きに行ってもいい？」

え？

意外な言葉にあたしは少しびつくりした。

あたしが合唱部でピアノを担当しているのを田崎くんは知ってる。でも今まで一度も「聴きたい」なんて言われたことはなかった。

「昼練あるんでしょ？」

「んー、でも筋トレだから遅れてもいいし。聴いてみたいなーと思って」

あたしは迷った。

そう言ってくれるのは正直うれしい　でも。

「ごめん、今日……弟と一緒にんだ」

「弟？　ああ、特進クラスに入学したんだっけ」

「そう。校内案内しろとか言ってるさ。でもよかつたら来る？　どうせお昼食食べてからにしようかと思ってたから」

そう提案しかけた言った時だった。

「透子」

その声にはっとして顔を上げた。

教室の後ろのドアのところに聡太が立っていた。

ぎゃーっ！　なんているのよ！

お弁当組の女の子たちが見えない糸で引つ張られたかのように、いつせいに聡太の方を振り向いた。

背が高い上に女の子が好きそうな整った顔立ちの聡太は、そこに立っているだけで人目をひく。そうでなくても、赤ネクタイの二年のクラスに一年生の青ネクタイは目立つのに。

「あれ弟？　カッコイイね〜。似てないけど」

田崎くんも後ろを振り返って、そしてあたしをまじまじと眺めた。

そりゃそうです。

血が繋がってませんから。て、前に話したんじゃないかな。

早く、と聡太の目が促す。

女の子たちの視線が突き刺さって痛いみたいだ。

あたしは急いで机の横に下げて置いたお弁当のバッグを取った。

「ご、ごめんね。また後で！」

田崎くんに早口で告げ、そして出口にダッシュ。

また何か言おうと口を開きかけた聡太を、張り手で廊下に押し出した。

* * *

「もう！　渡り廊下で待ち合わせって言ったでしょ。なんで来ちゃうかなあ」

裏校舎への渡り廊下へ差し掛かってから、あたしは勢いよく後ろの聡太を振り返った。

少し遅れて、聡太は仏頂面で角を曲がって来た。

「あんな勢いよく突き飛ばすことないだろ。ただ迎えに行っただけなのに」

「そんなこと頼んでないでしょ。二階の、この渡り廊下で待ち合わせって朝言っただじゃない！」

「……間違えて三階まで上がっちゃったんだよ。だったら呼びに行っただ方が早いと思って。教室どこだろうと思って歩いてたら、廊下から姿が見えたから」

口を曲げながら、聡太は横を向いた。

渡り廊下は中庭のちょうど真上を横切っている。

窓からは、満開の桜の下へ校舎から生徒たちがぞろぞろと出てくるのが見えた。

「余計なことしないでいいの！ あんたは目立つんだからっ！ 噂になっただらサイアク」

くるりと前を向いて、あたしは人気のない渡り廊下を歩き始めた。学校ってほんと、光の速さで噂が広まるんだから。

ただでさえ、あたしたちには「血の繋がらない姉弟」なんていうオプシオンがある。

それが知られた時には「禁断の愛」だのなんだのとかかわれるに違いない。

中学の時の二の舞はごめんだ。

「……気にしなきゃいいじゃん、なっただって」

だるそうな上履きの音が後を追ってくる。

そつえば同じことを昔も言っただ。

からかわれてむきになって同級生を追い掛け回していたのはあた

しだけで、何を言われても聡太はいつも涼しい顔をしていた。
「たいして誰も気にしないよ。透子は自意識過剰だ」

無視、無視。

足早に廊下を渡り終えて階段を上がり、あたしは一直線が一番奥に向かつて突き進んだ。

そして一番奥の教室の、立て付けの悪い引き戸を開いた。少し埃っぽいいつもの準備室の臭いがあたしを迎えた。

日当たりのいい準備室は陽射しが惜しみなく降り注いでほかほかしている。

窓のすぐ外に枝を張る満開の桜が、いつそう部屋の明るさを引き立てているみたいだった。

窓辺で待っている古ぼけたピアノの元へ、あたしは歩み寄る。

「へえ、結構広いんだ」

ご機嫌斜めな扉をなんとか閉めて、聡太が入ってきた。ぐるりと部屋の中を見回している。

今は本校舎の方にあるけど、昔はここが音楽室として使われていたらしく、準備室といえども大きさは一般の教室よりも少し大きい。でも使わなくなったオルガンや壊れた楽器類が半分占拠しているから、使えるスペースは教室より狭い。

それでもあたしには十分なんだけど。

「ここはあたしの一番お気に入りの場所なんだから、入れるのは今日だけだからね。いい？」

物珍しそうに見物している聡太にあたしは一応念を押す。

「えらそー。自分の所有物みたいに」

「先に見つけたもん勝ちよ。ほら、さっさとお昼食べないと校内回る時間なくなるよ」

聡太の嫌味を受け流して、あたしはピアノの椅子に座ると、膝の

上でママが作ってくれたお弁当の包みを解き始める。

聞こえよがしに溜め息をついて、聡太はピアノの隣の机を引き寄せてどっかりと座り、手に提げていたコンビニの袋からサンドイッチとパックのコーヒー牛乳を取り出した。

「ママにお弁当作ってもらえばよかったのに」

サンドイッチの袋を破る音を聞きながら、あたしはお弁当箱の蓋を開けた。

ああ、やっぱり昨日の酢豚が入ってる。

「だって、こっちの方がうまいし」

ハムとレタスのたっぷり入ったサンドイッチに聡太はかぶりつく。今朝電車に乗る前に、駅前のコンビニで聡太はお昼を買った。

お弁当をぶら下げて、あたしはそれを待っていた。……少し、うらやましく思いながら。

「寂しそうだったよ、いらないうって言われて。ママ、聡太にお弁当作ってあげるのが夢だったみたいだよ」

あたしは酢豚の横にある少し焦げた卵焼きを箸に刺した。

「だって前の晩の残り物ばかりじゃん。ただでさえ、メニューのバリエーションが少ないんだから、続けて同じものはせめて食べたくない」

お菓子みたいに甘い卵焼きを噛み潰しながら、淡々と喋ってのける聡太をあたしは睨んだ。

「ひどいやツ。ワガママ」

「本当のことだからしょうがないだろ。食べてやるっか、それ涼しげな目付きであたしを見、聡太は長いきれいな指でお弁当箱の中身を差した。

あたしはぐつと詰まる。

「い、いいわよ、食べられるもの」

「ほんとかよ」

「ほんとだよ！ 余計な気、使わなくていいよ」
「そう言っつなら、無理なんかするなよ」

その一言に、あたしは面食らった。

表情がなくなっていくのがわかる。

「嫌なものは嫌って言っていていいんだよ。それはワガママなんかじゃない。そうやって自分を誤魔化したって何の得にもならないよ」

呼吸が引きつりそうになった。

だめよ、こんなことで動揺しちゃ 込み上げそうになったものをあたしはぐっと堪える。

「無理なんてしてないよ、あたし。本当に食べられるようになってきたのよ、酢豚」

「そのわりには毎回、渋い顔して食べてるけど。なんでそこまで我慢するの？」

酢豚の肉に挿したまま箸を握る指に、自然と力がこもる。

なによ。

なんで急にそんな話をし出すのよ。

尋問するような聡太の態度に、あたしは無性に腹がたってきた。

「ママがせっかく頑張って作ってくれたのに、嫌いだなんて言えないよ。きつと傷つくわ。あんたは思いやりがなさすぎなのよ、ママにいつも反発したりして」

ママが苦手な家事をどんなに頑張ってきたかあたしは知ってる。
聡太も同じはずだ。

それがわかっていて文句が言える聡太が、あたしにはわからない。

「透子のは思いやりじゃない」

喧嘩口調になったあたしに、聡太も語調を強めた。

「それは遠慮、って言うんだよ。なんで遠慮してるんだよ、家族なのに」

「家族だつて、遠慮とか我慢は必要な時もあるわよ」

「そうかもしれないけど、透子のは不自然だ。ぶつかつたつて、喧嘩したつていいじゃんか。それが普通だろ。損得勘定なんていらないんだよ。無理して笑ってる透子なんて見てたくない」

追いかけるようにお互いの声が大きく、尖っていく。

鼓動が早くなってる。

息苦しい。

だめだ、このままじゃ。やめなきゃ。

取り返しがつかなくなる

「……いいんだよ、これで。今までそうやってうまくやってきたじゃない。あたし本当に無理なんてしてないから」

お弁当箱の蓋を閉め、包んであったハンカチごとあたしはバッグ

に戻した。

せつかくおなががすいたところだったのに、どっかに消えてしまった。

「だからもう、そういう話はやめよう」

聡太の視線をしっかりとらえてあたしはそう幕を下ろす。

聡太は何か言おうと口を開きかけたけど、結局呼吸とともに飲み込んで目線を床に落した。

「早く食べちゃいなよ。時間、ほんとになくなるよ」

昼休みは五十分。

時計を見れば、もう十二分も消費してしまっていた。

お弁当箱の入った袋を床に置いて椅子に座り直し、あたしはピアノの蓋を開いた。

ピアノを弾けば気分が紛れる。

斜めに傾いてくる気持ちやを和らげてくれるのは、いつも音楽だった。

楽譜がなくても弾けるレパトリーの中から、あたしは一曲選ぶ。

メンデルスゾーンの春の歌。

「……うまくなったよね、透子」

何小節か弾いた頃、聡太が横からぼつりと言った。

自然と口元が綻む。

「そりゃそうよ。五歳からやってるんだもん」

ピアノを始めたのは小学校に上がる前、本当のお母さんが病

気で死んで半年くらいたった頃だったと思う。

あたしはお父さんにせがんで、中古のピアノを買ってもらった。

本当に、習いたかったわけじゃなかったんだけど。

「ピアノ教室、続ければよかったのに」

聡太が言う。パックにストローを挿した音がした。

「だって、もうある程度弾けるようになったし。もう自己流でいいかなって思ったの」

中学を卒業すると同時にあたしはピアノ教室をやめた。

でもあたしとしては、よくあんなに長く続いたものだと思う。だって

本当は、お母さんのいない寂しさを

紛らわすためだったんだから

「あたしはこれ以上上達しなくても、こうして弾いてるだけでいいの」

でもそのおかげであたしは音楽が好きになった。

自分に誇れるものを見つけた。

それはとつても幸運なことだと思う。

「久しぶりな気がする。こうやって、透子のピアノ聴くの」

机から降りて、聡太はピアノにもたれて立つ。

背の高い聡太に見下ろされると、急に周りが狭くなったように感じた。

「ここんどこ……半年くらいは家ではあんまり弾いてないかも。受験勉強に影響しないようにって、あんたがいる時は控えてたし。でもここの方が集中出来るからいいんだ」

別に嫌味で言ったわけじゃなかった。

でも責められているように感じたのか、聡太が小さく「ごめん」と言った。

ピアノを弾く手を止めて、あたしは聡太を見上げた。

「謝らなくていいわよ。ピアノがあれば、あたしはどこだっていいんだから」

まるで喧嘩して気まづくなった後のように、聡太は合わせた顔を別の方向へ逸らした。

遠い目、ちよつと落ち込んだような顔だ。

何よ、あたしがいじめたみたいじゃない。

聡太がこういう顔を見ると、身に覚えがなくとも悪いことをしたような気になってきてしまう。

人に自慢出来る容姿の弟は時々、標準を地道に生きる姉をあつという間に小心者に変身させるのだ。

でもあたしはその時気付いたんだ。

聡太の言った「ごめん」が、ピアノのことに對してだけじゃないことを。

「……あたしは別に気にしてないけど。あんたが県立やめて、うちの高校を受験したこと。気にしてるのはママだよ」

高いお金をかけて、家から車で一時間かかる有名進学塾に聡太は通っていた。

ママが熱心に送り迎えして。

あたしも塾には行っていたけど、聡太の月謝はあたしの二倍だった。

聡太は昔から頭がいい。

中学ではいつも成績は一番だったし、全国模試では百番以内に入ってた。

あたしたち家族はみんな、毎年東大合格者を出してる県立の進学校へ行くものだと思っていた。

でも聡太は最終進路決定の時、突然進路を変えて市立の特進科へ推薦希望を出した。

「ママ、ほんと聡太のことになると親バカだよね。でもさ、確かにうちの学校レベルが高いとは言えないし、進学率だってたいしたことないみたいだし、いいの？ってあたしも最初は心配になったけど」

自分の学校のことなんだから、褒めたいんだけど。

もちろん、のんびり過ごせるこの校風は魅力だとあたしは思う。

けどママにはそんなこと二の次だ。

あたしとお父さんは、聡太が決めたなら仕方ないと思った。

でもママには大打撃だったんだ。

……そりゃそうだよな。

せつかくの塾通いが水の泡になっちゃったんだもの。

「見栄だよ、見栄」

聡太が溜め息を吐く。

「世間体を気にしすぎるんだよ。未婚でオレを生んで、夜の仕事してきただろ。他人に対して劣等感を感じてるんだよ。だから、オレで挽回したいんだと思う」

確かにそうかもしれない。

聡太のことになるとママは、自分のことのように一生懸命だから。「でも期待された方にしたら、うんざりすることだってある。オレ

だつてさ、自分の進路くらい……自分で決めたい。そうするのが普通だろ？」

推薦が決まった後も、聡太とママは何度もぶつかった。

最終的にはママも折れたけど、顔色を無くして呆然としていた姿は忘れない。

普段の華やかなママからは想像出来ない表情だった。

あの絶望に染まった目には、あたしの存在なんて片隅にも映っていなかったらう。

時々思い出すと、ちょっと複雑な気分になったりもする。

「うんざりだなんて、ママの前で言っちゃだめだよ」

あたしの忠告に、きれいなおうとつで形作られた人形みたいな顔がしかめっ面になった。

聡太の口元がへの字に曲がる。

「……透子はいつも、母さんばかりだ」

ピアノにもたれていた体を離すと、聡太はあたしの真横に立つ。長い指がすつと白い鍵盤に伸びた。

ポーン。

「ねえ、覚えてる？」

古びてくぐもった音の余韻を割るように、聡太が言った。

「昔、ピアノ教室の発表会で連弾したよね。カノン」

聡太の指がたどたどしく、音を探し始める。

「……覚えてるよ。小学校の時だよ」

『いい？ あたしの後から弾くんだよ』

聡太の辿ろうとしてしている思い出の音色が、昔の記憶を呼び起こす。あたしたちが姉弟になった時、あたしは七歳、聡太は六歳。

聡太はいつもあたしの後をついてきた。

あたしの真似をしたがった。

ピアノも縄跳びも

「透子と一緒に弾けるのが、オレはうれしかった。教えてもらうのが好きだった」

『つられちゃダメだよ。ソータがあたしを追いかけてこないときれない曲にならないんだから』

『だって、むずかしいよ、おねえちゃん』

『大丈夫、ゆっくりやろう。さん、はい』

あたしはずっと兄弟が欲しかったから、聡太があたしを頼るのがうれしかった。

得意だった。

でも『おねえちゃん』でいるには、いつも聡太より先にいることが大事だったんだ。

「……あつという間に覚えたよね、あんたは。あたしがてこずったバイエルも先に終わって。カンがいいって先生も言ってた」

聡太の右手の指が、カノンのメロディを掴んでいく。

何度も何度も二人で練習した、あの曲を。

青いバイエルもツエルニーも、あたしより早く聡太は終わった。

きらきらした目であたしを見上げていた子は、いつの間にかあたしより大きくなって、先に歩くようになって、みんなから一目置かれるようになっていった。

聡太はいつから、あたしを『おねえちゃん』て呼ばなくなったんだろう……。

「ねえ」

あたしよりも長くて骨ばった、聡太の指がふいに止まり鍵盤から離れた。

「オレが進路を変えたの、なんでだと思っ？」

ためすような口調。

鍵盤に落していた目を持ち上げれば、聡太もあたしを見ていた。

やだ。

そんな目で見ないで。

メトロノームの音が、わずかにずれた。

「詰襟が……やだったんでしょ？ ネクタイだって窮屈じゃない」
笑って終わりにしようと思ったのに、聡太の目は笑わない。
空気が張り詰める。

外は春の風景であふれているのに、弾き出されたみたいだ。

何か言っつてよ、聡太。

何か言わなきゃ、あたし。

クレヨンで画用紙を塗りつぶすみたいに、気持ちがあぐしゃぐしゃ
になってくる。

たまらずあたしは、ピアノの蓋に手をかけわざと音をたてて引き
下ろした。

「おしまい！ こんなことしていると、ほんとに時間なくなっち
ゃうよ」

かろつじて明るく言えた。

聡太がわずかに眉をひそめた。あたしは見ないふりをした。

その時、教室の壊れかけたスピーカーから、途切れ途切れのチャ
イムの音が鳴り響いた。

【第五楽章】 さくら

電車から駅のホームに降り立った時、ブレザーのポケットがぶるぶると震えた。

三回でバイブが切れたから、メールだ。二つ折りの携帯を引っ張り出して開く。美香からのメールだった。

『並木公園にいるよ』

並木公園は、駅から家に帰る途中にあるグラウンドと体育館併設の大きな公園だ。春には満開の桜並木を見に、花見客がたくさん来る。

でもなんでそんなところに？

美香の家は、あたしの家とは逆方向だ。学校を軸にすれば、あたしは下り線に乗り美香は上り線に乗る。

現在時刻は三時四十五分。学校さぼって何してたんだか、と思いつながらあたしは「今から行くよ」と返信した。

駅を出て、商店街の通りをあたしはいつも通り家の方向に向かって歩き出す。

今日は部活がなかった。週に一回、水曜日だけは練習がないのだ。お昼までは晴れていたのに、夕方になるにつれて空はだんだんと曇ってきた。

何かに急かされるように日差しをさらって雲が流れていく。

今朝見た天気予報ではそんなこと言っていなかった気がするけど、雨になるのかな。

そうなら、暗くなる前にさっさと帰ろう。

並木公園には、平日なのにたくさんの人が来ていた。

いつもは寂しそうに点々と置かれたベンチも、見たところ全部埋まっている。

子供連れのお母さんが多いけど、中にはスーツを着たおじさんたちもいる。手に青いシートやスーパリーの袋を提げているから、お花見に来たんだろう。

入り口から奥のグラウンドまで続く満開の桜のアーチの下を、あたしは上を見上げながら歩き出した。

夜になるとここは提灯の明りでライトアップされて、幻想的な風景になる。両側に広がる広場では、花見客たちがシートを広げていそいそと宴会の準備を始めていた。

きれい……。

薄桃色で染め上げられた天井から、花びらが零れ落ちてくる。

桜つて本当に、はらはらりと音がするようには散るんだ。一枚、一枚、ゆっくりと絶え間なく。

その儂い光景を見上げていると、わけもなくせつない気持ちが込み上げてくる。

咲いて散る、花にとっては当たり前のことなのに、それが何だか悲しい。舞い散る花が、涙のように見えるからだろうか。

そんな風に少し感傷的な気持ちに浸っていると、手に持っていた携帯がまた震えた。

『ついたあ？ まだ？』

通話ボタンを押すと、甘えたようにしゃべる美香の音が電話口から聞こえた。

「着いたけど、どこにいるの？」

携帯を耳に当てて、あたしは辺りを見回した。

『えつとねえ、真ん中へんのベンチにいる。あ、見えた！ ここ、

「ここ！」

すると少し先のベンチから、美香らしき女の子が大きく手を振っているのが見えた。携帯を切ってポケットに入れると、あたしはベンチに駆け寄った。

「おっつかれえ〜」

チアリーダーの掛け声並みの元気のよさで、美香があたしを迎えた。

美香は私服だった。

黒のスキニージーンズに、白のエナメルパンプス、ベージュのショートトレンチに若草色の春マフラー。きついスパイラルパーマをかけた髪は、今日は頭のとっぺんで大きなおだんごにしている。

私服だと、美香は大学生くらいに見える。

「どうしたの、こんなところで。学校サボって、まさかずっとここにいたの？」

「ううん、と首を振って美香はベンチに座った。あたしもカバンを抱えて隣に座る。」

「おねえちゃんのアパートに行ってたんだあ。ここから三十分くらいのところなの。でもおねえちゃん仕事で午後出かけちゃったから、暇だなーと思って散歩してたらここ見つけて。そっいえば透子んちが近かったなって思い出して、メールしてみた」

「そっか。そっいえば美香のお姉ちゃんはこの辺の会社に勤めてるんだっけ。」

「よく覚えてたね。美香、一回うちに来たことがあるだけなのに」「フーン。あたくし、記憶力はいいの。水曜は合唱部の練習がないことも、ちゃんと頭に入ってたよん」

にっときれいに並んだ歯を覗かせて笑うと、美香は脇に置いたコンビニの袋の中からウーロン茶のペットボトルを取り出してあたしに差し出した。

「ありがとう」

受け取ると、美香は自分の飲みかけのレモンティーのボトルを開けて口元へ傾けた。

こういう瞬間、あたしはちょっとうれしい。

友達が自分の好みを覚えていてくれる。

美香とあたしの付き合いはたった一年だけど、あたしだって美香の好き嫌いはちゃんと覚えてる。ただ単に一緒にいたわけじゃなくて、あたしたちはちゃんとお互いを知りながら過ごしてきたんだと、こういうささいな出来事は実感させてくれる。

「ねえ、大丈夫なの？」

ウーロン茶のキャップを回しながら、あたしは横の美香を見た。

「なにがあ？」

「学校だよ。美香、一年の時も結構遅刻欠席したでしょ。あんまりテキストにやっていると、卒業できなくなるよ」

呑気に訊き返す美香に呆れながら、あたしは一口お茶を飲んだ。

「わかってるよお。でも、日本人なら春には桜を見なきゃ」

頭上を仰いで、美香は桜を受け止めようとするように両手を広げた。

本気で心配してるのに軽く流されて、あたしはちょっとむっとする。

「ちょっと、マジメに聞いてよ。テストだって毎回追試じゃまずいんだからね」

少し本気で声を尖らせると、美香はまあまああたしの肩を叩いた。

「だあいじょうぶだよ、今度はちゃんとやるって。透子先生がついてるんだし」

「あたし頭よくないよ」

「いつも三十番以内に入ってるじゃん。あたしから見たら天才の領域だよ」

それはこの高校のレベルでの話。あたしの偏差値なんてたいしたことない。

「まったくもう。美香といい田崎くんといい、どうしてあたしの友達はいいい加減なのよ」

溜め息が深くなる。

何を根拠にそうノー天気でいられるんだろう。

美香や田崎くんの性格や好みは知っていても、頭の中まではわからない。

……一生のナゾかも。

「あ、コアラちゃん元気？ 春休み中メールは何度かしたけど、まだ会ってないんだよね」

よししょ、と美香はベンチの上に足を上げてあぐらをかいた。

「今日はチャイム前に来てたけど、授業はほとんど寝てた。相変わらずだよ」

「あははっ、せっかくジャマ者が抜けて大チャンスなのにダメなやつー」

「チャンスって？」

聞き返すと美香はあたしを見、何か企んでいるようににやっと笑った。

「気付いてないんだあ、やっぱ。コアラちゃん、あんたのこと好きなんだよ」

「はっ!?!」

思わずあたしは腰が浮きそうになった。

田崎くんがあたしを好き??

「……そんな素振り全然ないけど」

一瞬どきつとしちゃったけど、思い当たるふしがまったくない。

頭に浮かぶ田崎くんはいつも、机に突っ伏して寝ているか眠そうに顔を上げた姿だ。いつものほほんスローな彼の視界に、あたしがそ

んな大そうな存在に映ってるとは思えない。

首を傾げたあたしを美香が笑う。

「だろうねー。知ってる？ TVで見たんだけど、コアラって脳ミソがすごい小っちゃいんだって。だから難しいことは覚えられなくて、行動パターンが同じになっちゃうれしい。いつも眠そうにしてるのはユーカリを食べてるせいなんだけど、それにも気づけないんだってさ。あいつも似てるよねえ。このままじゃ一生気付いてもられないよって言ってやったんだけど」

「田崎くん本人から聞いたの？」

「ううん、そんな感じがしたから忠告しただけ」

なにそれ、美香の単なる憶測じゃない。ちよっぴり構えてしまったあたしは損をした気分になった。

それにしても、脳みその大きさをコアラと比較するなんて、美香にとって田崎くんはどんな存在なんだか。

「なーんだ、美香の先走りか」

「違うよお、絶対そうだって！ 見てるとなんとなくわかるの。でもさ、もし好きだって言われたら、透子どうする？ 付き合う？」

美香が調子に乗って肘で突付いてくる。

田崎くとあたしが？

もちろん田崎くんのごときは好きだし、無理をしなくていいから一緒にいて楽だ。

だけど、恋愛対象として意識したことなかった。三人でいるのが楽しかったから。

「うーん、考えたことない……わかんないな。でも今は恋愛ってあんまり興味ないかも」

「それ去年も聞いたよ、透子ほんとにカレシいらなの？ いくらでも紹介するよ？」

美香が得意げに胸を張る。

美香は他校に友達が多い。彼氏と別れても男の子の存在が絶えない。今は付き合っている人はいないみたいだけど、チアの応援で知り合った人と結構合コンとかもしているみたい。時々誘われるけど、あたしはそういうのが苦手で断っている。

「んーまだいい。今は部活に集中したいんだよね」

「マジメだなあ、透子は。髪も染めないし、スカートも膝上五センチで規則通りでしょ。義理のお母さんとも仲良くやってるし、偉いよ、ほんと。あたしなんて実の母親ともぶつかるとのにさあ」

偉い？

膝の上で両手で挟んでいるウーロン茶のボトルをあたしは見下ろした。

違うよ。

聞き分けがいいんだよ、あたしは。

本当は……て言い出したらきりがいいから、欲求をおさえて静かにしているだけ。

だって、何事も平和なほうがいいじゃない。面倒なことはないほうが。

衝突すれば壊れるかもしれない、それは怖い。

「そんなことないよ。言いたいこと言い合えたほうがいいじゃない」

だから、全部弾いて消していくの。

感情が高ぶりそうになったら、一つ。

我慢するために、一つ。

リズムが狂わないように。

「そうかな？ 時々ほんとすごいよ、取っ組み合いになるもん。」

ガマンしなきゃいけないのはわかってるんだけど、あたしもお母さんも気が強いんだあ」

レモンティーを飲み干して空のボトルをコンビニの袋に入れると、美香はベンチに乗せていた足を地面に下ろした。あたしは小さく笑う。

「……でもうらやましいよ。なんかシンプルでいいじゃん」

シンプルになれたら。

あるがまま、いられたら。

ジュースやコーヒーになる前の、透明な水みたいに。

「何かあったあ？ 透子」

ベンチから立ち上がった美香が、覗き込んでくる。下がり気味になった気分を払いのけて、あたしは首を横に振った。

「くだらないことでも、なんでも相談するんだぞー。つきあいは短いけど、透子あたしの大事な親友なんだからサ。美香さん、テキトーだけど、意外と頼りになるよ？」

口が伸びていきそうなほどにこーっと美香が笑う。

ほわん、と胸の中で何かが弾けた。

「……うん」

あたしは小さく頷いた。ちょっと上手く笑えなくて俯いた。

その間に美香はぱっと走り出す。

「ねえ知ってる？」

桜の下で、美香が両腕を広げた。

「舞い散る桜の花びらをつかめたら、幸せになれるんだってさ」

そう言って、ひらりと目の前を過ぎる花びらに手をのばす。

「なにそれ」子供みたいにえい、えい、とジャンプしている美香を見てあたしは笑った。

「これから散るうとしてるの？」

「夢がないなあ。いいウワサは信じとくもんだよつ。とぉっ！」

掛け声を上げながら、花びらをつかまえようと美香が何度も飛び上がる。でもすばしっこい花びらは、宙を舞って逃げていく。

「けっこうムズいよ、これー。透子もやんなよ！」

美香に促されてあたしはカバンを置いて立ち上がる。

暗さを含み始めた空をあたしは見上げた。はらはら、はらはら、花びらが零れ落ちてくる。

辺りは暗くなっていくのに、小さな欠片は蛭みたいに淡く輝いて。幻のように、夢のように。

「えいつ」

あたしも飛び上がって、腕を一振りした。

拳を作った手の中にかすかな感触。

開いてみると手の平の真ん中に、ほんのりピンクの花びらが一枚、ちよこんと座っていた。

【第六楽章】 嵐の夜

公園の入り口で美香と別れて家に向かい始めた頃、辺りはもう薄闇に包まれて夜に向かい始めていた。

少し風が出てきた。空を流れる雲の速さは相変わらずで、煙のように黒く不気味にうねって見えた。

やっぱり雨になりそう。

公園の花見客たちは気の毒だな。そんなことを思いながら、あたしは足を速めた。

家に帰ると、ママが急いでいる様子で廊下に走り出てきた。

「あ、透子お帰り！ ごめんね、急いでて。これから出かけるの」
巻き髪を下ろして白のアンサンブルスーツを着たママは、廊下の壁に掛けてある鏡の前に立ってピアスをつけ始めた。

「友達とごはん食べてくるわ。たぶん、飲むからちよっと遅くなる」
聡太の靴の隣にローファーを揃えて脱いで、あたしは廊下に入った。

「車で行くの？」

靴箱の上に置いてあるブランド物のバッグをあたしは見た。バッグの口から、同じブランドのキーケースが見える。

「飲んだら運転はダメだよ、ママ」

ママは一回飲酒で捕まっている。さすがに心配になってあたしは言った。

「わかってるわよ、気をつける。昔は何杯飲んでも平気だったんだけどねえ、最近はめっきり弱くなっちゃったからほどほどにするわ

よ

「ひらひらと手を振ってみせて、ピアスをつけ終えたママは髪の毛や化粧の具合を鏡で確認した。

「気をつけてね、雨になりそうだから」

玄関のドアを振り返る。風にざわめく木の音が聞こえる。さつきよりもまた強くなったみたいだ。

「あらほんと？ そうそう悪いけど、今夜は店屋物とつてくれる？ お金はテーブルの上に置いておいたから」

くるりと一回りして、ママはスーツの具合も確かめると鏡の中の自分に頷いて階段へ小走りに向かう。そして二階へ向かって大声で呼びかける。

「聡ちゃん！ じゃあ出かけるから。おねえちゃんと出前とつて食べてね」

“おねえちゃん” 久しぶりに言われた気がした。

なんかちよつとくすぐつたい。

言い終えると、ママはストッキングで滑るのかぎこちない走り方であたしの前を通り過ぎ、玄関に降りた。

「じゃあ、よろしくね透子。パパにも何かとつてあげてね。あら、何か落ちてるわよ」

パンプスを履いて振り返ったママの目があたしの足元に止まる。言われてあたしは下を見た。

「じゃあ行ってくるわね！」

陽気に言い置いて、ママは出て行った。ドアが慌しく閉まる。

あたしは屈んで、足元に落ちている三枚の白い花びらを拾い上げた。

あーあ、散っちゃったか。

制服のポケットに挿していた小さな枝をあたしは取り出した。

さつき公園で摘んできた桜の花。押し花にしようと思ったんだ。

でもきれいについていた花びらは、軸を残して三つのうち二つが裸になっていた。

こんなにもろいんだ、桜って。

風からかばうようにして持ってきたつもりだったのに。
あっけなさにあたしは少し戸惑いを覚えた。
どうしようもない、この儂さに。

花びらを拾って上着のポケットに入れた。

玄関のドアが風に軋む。

嵐の音が近付いていた。

二人で相談した結果、夕飯はピザをとることになった。

てりやきチキンとマルゲリ タどっちを注文するかで軽くもめたけど、じゃんけんであたしが勝ってマルゲリータを頼んだ。

二十分後くらいにピザが届き、あたしたちは居間でテレビを見ながらおまけでついてきたコーラをコップに分けて夕飯をとり始めた。そして最後の一枚をじゃんけんにかけて聡太にとられた時、雨が降ってきた。かなり大ぶりだ。閉めたカーテンの向うから、雨が地面と雨戸を叩く激しい音が聞こえてくる。

「ねえ、二階って窓全部閉まってるかな」

テレビの音に被さるほどの轟音に、あたしは天井を見上げた。聡太がさあ、と肩をすくめる。心配になってあたしは立ち上がった。

「ちよつと見てくる」

居間を出て、あたしは階段を駆け上がった。

ゴロゴロという不吉な音が、雨音に混じって聞こえた。

やばい。

あたしは急いで自分の部屋、聡太の部屋、両親の部屋の戸締りを確かめて再び階段を駆け下りた。

「やだなー、雷鳴ってきたよ」

ちよつと寒気を覚えて両腕をさすりながら居間に入っていくと、

聡太はテレビの前にしゃがんでいた。

「何してんの、聡太」

「借りてきたDVD、見ようかなと思つてさ」

テレビ台に置いてあるDVDプレイヤーにディスクを入れ、リモコンを持って聡太はソファに座った。

「おもしろいやつ？」

クツションを抱えてあたしも隣に座った。地鳴りのような低い音がまた聞こえた。

「ううん、怖いやつ。ほんとだ、雷きそうだね」

クイズ番組を映していた画面が切り替わり、真っ暗になった。聡太がリモコンで音量を上げる。

「ちよ、ちよつと！　なんでこんな時にホラー映画なんて見るのよ。やめてよ」

あたしは思わず聡太の腕を掴んで引き止める。冗談じゃない、ただでさえ雷は苦手なのに。でもホラー映画好きの聡太にあたしの願いは聞き入れられない。

「逆におもしろいじゃん、雰囲気盛り上がって」

「おもしろくないっ。後で見てよそんなもん」

「だって明日返却だし。嫌なら見なければいいじゃん。テレビ見たいなら、自分の部屋に行つたら？」

にやついた口元で聡太がからかうように言った。

くそう、わざとだ。聡太はあたしが雷が鳴っている時に一人でいられないのを知ってるから。

薄笑みを浮かべたまま、聡太は顔をすいと画面に向けてしまった。映画が始まる。

悔しい。でも強がることも出来なくて、あたしはソファの上でクッションごと膝を抱えてテレビ画面を見据えた。

誰かの視点で物語は始まった。

暗い家の中、音もなく場面は進んでいく。

キッチン、居間を通りすぎ奥の部屋のドアを開ける。中のベッドでは大人の男女が寝ている。それを確かめ、部屋を出ると今度は二階へ……

あたしはクッションに少しずつ顔を埋めていく。でも目が離せない。怖い物みたさ、ってやつだ。

二階へ上がった誰かは、階段の近くの部屋のドアを開けた。子供部屋のようだ。中に入り、ベッドの前に立つ。女の子が寝ている。

ちょうどその時、太鼓を何重にもしつこく叩いたかのような派手な音が響き渡った。

「ぎゃーっ！っ！」

あたしはびっくりして逃げ出そうとして失敗して、ソファの下に転がり落ちた。

「バカじゃねーの。パンツ見えたぞ」

聡太が爆笑した。

デニムのスカートのお尻をおさえてあたしは振り返りざまに聡太をにらむ。

「すけべっ。だってびっくりしたんだもん！」

「透子は怖がりだよなあ。普段は飄々としてるくせに」

「ヒョウヒョウて何よ」

「ドジで臆病なのにクールぶってるってこと」

「うそだ、絶対。あんたの解釈でしょそれ」

またでかい衝撃音がとどろいて、あたしはぎゃーと頭を抱え込んだ。確かにカツコつかない。

「もう止めてよー」

思わず弱音ができる。だって嫌いなものは仕方ない。雷とは触れ合えないんだもの。努力

して食べられるようにはなった酢豚とは違うのだ。

「オレに言われても天気の間嫌とするのは無理」

「あんたはまずそのビデオを消すの〜！」

少しでも恐怖を減らしたくてわめけば、呆れた様子で私を見下ろして、はいはい、と聡

太はDVDのリモコンを取った。

「そうやって嫌なものは嫌って言えばいいのに。やせ我慢するよりずっと簡単だよ」

黒に切り替わったテレビ画面をあたしはにらんだ。

聡太は近ごろ小言が多い。

しかもわざと思い出させるように言う。バカみたいに成長したら、中身までどんどん生意気になってく。

「あたし、お菓子持ってこよ。トムアンドジェリーかけといて」

きかなかったふりをして立ち上がった。

「えー、あんな昔のアニメ？」

「いいの！ こないだ安売りしてたDVD買ったじゃん。まだ見えないし。プレーヤーの横にあるよ」

えーと不満げな聡太を置いて、あたしはキッチンへ行った。

戸棚を漁り始める。たしかポテトチップがあっただはずだ。

“素直になればいいのに”

何かと聡太は言う。

氣遣っているつもりなんだろう。だけど、それがあたしに劣等感を植え付けるんだ。

あたしは聡太みたいに頭がよくないし、器量がよくもない。

でも今までに蒔かれた強がりの種はたくさんあって、すぐ芽を出すから簡単には取りのぞけない。

土から替えないとだめなんだ。あたしがちっぽけなプライドを捨てないと。

だけど、自分を変えるには時間がかかる。長年身についたクセとか性格つてもう自分の一部で、簡単に付け替えられるものじゃない。形が合わなければ、元に戻ってしまふんだ。頑張って形を合わせてみようとしたこともあったけど、無理矢理ねじ込むほどの根性は私にはなくて。結局もとの鞘に収まってしまった。

我慢することですまくいってるなら、そのほうがあたしにとって
は楽ちんだった。

だったら変える必要なんて、きつとない。

「透子、始まったよ」

あれないや、ポテトチップス。

聡太の声に、あたしはとりあえず棚の奥に入っていたミルクシーの袋を引っ張りだしてリビングに駆け戻った。

「コーラ、なかったっけ？」

「ないよ、さつきピザについてきた分しか。お茶ならあるよ、飲みたいなら自分で持ってきな」

ちえ、と舌打ちして聡太はソファから立ち上がった。

ソファを背もたれにして床のラグの上に座り、あたしは袋からミルクシーを一粒拾い上げた。

テレビの中ではお決まりのネズミとネコの追いかっこが始まっ

ている。

包みをむいて、ミルクを口の中に放り込む。

甘い。かわいい、和む。リラックス出来そう。このまま雷様のお怒りが落ちなければ。

ゴロゴロと唸る声はまだ止まない。

まるで滝井の説教みたいだ。滝井の雷はどかーんと一度大きく落ちて、その後はくどくどねちねち続く。それと同じ要領なら聞き流せるんだけど、空のご機嫌は滝井よりも気まぐれだ。飽きさせずにびびらせるのが仕事だなんて夕チが悪い。

「まーたその、変なクセ」

そんな呆れた声がして、ガラステーブルの上にお茶の入ったグラスが置かれた。赤いラインが入ってるからあたしのコップだ。

ソファに戻って聡太が青いラインのグラスを口元で傾けた。その目はあたしの手元を見ている。

自分の手の中の、細くねじってわっかにしたミルクの包み紙を見て、あたしは「あ」と呟いた。

「透子は手癖が悪いんだよなー。ファミレスのおしぼりとかナフキンとか、気付くといつも破いたりくしゃくしゃ折ったりしてるし」
「行儀悪い、とママの真似をして聡太が眉間に皺を寄せた。薬指サイズの指輪くらいに丸くしたもと包み紙だったものを、あたしはテーブルの上に放り出した。」

「うるさいな、わかってるよ。ついで、ついでいけな、いけな。」

手持ち無沙汰になると、近くにある紙やごみをいじり始めてしまうのがあたしの悪い癖だった。ママが嫌がるからやらないように意識してきたのに。

口止め料、と手を出してきた聡太にミルクを二つ渡して、あたしはアニメに意識を戻した。お茶ありがとう、って言いそびれてし

まった。

「このアニメってさ」

続けざまに聡太が言った。

「どっかの国の評論家によれば、暴力的なんだって」

「なんで？ ネコがネズミを追いかけるから？」

「そお。虐待に値するんじゃないかって意見があるらしいよ」

なにそれ、とじゃれあいには見えないう二匹から視線を外して聡太を振り返り、あたしは再び「あ」と声を上げた。

ミルクィを口の中で転がしながら、聡太が怪訝そうな顔をする。

ただどあたしが何に反応したのかに気付くと、どこか気まずそうにふっと笑い零した。

聡太の手の中、そこにはさっきあたしが手放したのと同じ包み紙の指輪があったのだ。

「人のこと言えないじゃない。誰が手癖が悪いって？」

「ちーがうって。これは」

テーブルに投げすてて、聡太が反論しようとする。だけど珍しく戸惑って目が泳いでいる。いつもの余裕がはがれ落ちて、うぶな15歳の顔が覗く。

「何が違うのよ。言い訳はみつともないぞー」

勝ち誇ったような高揚感が沸きあがってきて横目で見てやると、聡太はお決まりのへの字口になった。

「透子が変わなクセ持ってるのが悪い。透子のがうつつたんだ」

首席入学の秀才が言うには子供じみた言い草に、あたしは笑った。「人のせいにする気い？ それはあんたがあたしの真似ばかりしてたからだよ。お姉ちゃん、お姉ちゃんていつもまとわりついてさ。金魚のフンみたいに」

今ではそんな面影もないけど。

でもテーブルの上の二つの小さな輪が思い出を引き寄せてくる。

ただの小さな紙くず。だけどこれは、あたしたちが確かに長い間を一緒に過ごしてきた証のように思えた。

「……癖まで同じなんておかしいの。血が繋がってなくても、姉弟って似ちゃうもんなのかなあ」

ポンプで押し出されているようにおかしさが込み上げてくる。たいたしたことじゃないのに、写真におさめてとっておきたいような気持ちだった。

「 違うよ」

ほっこりとあったかくなったらあたしの中に、聡太の眩きが一粒の雨みたいに落ちてきた。

「 誰よりも、傍にいるからだよ」

その時だった。

カーテンのわずかな隙間からピカツと閃光のような光が見えたかと思うと、辺りを震動させるくらいのとてつもなく大きな雷鳴が轟いて、急に部屋が真っ暗になった。

「きゃーっ!!!」

心臓が飛び跳ねる。雷の音が自分の叫び声かどつちに驚いたのかわからないまま、あたしは頭を抱え込んで床に蹲った。

「やだーっ! やだやだ怖い怖いーっ!!!」

二度目の大太鼓がドドーンと鳴り響いた。絶対、絶対に落ちた! 逃げようと這いつくばって前に進むうとして、あたしはテールブルの角に思い切りおでこをぶつけてまた「きゃー」と悲鳴を上げた。

「そうたっ、聡太どこ!? あんた男でしょ! おねえちゃんを守りなさいよー!!!」

ズキズキするおでこの痛みで悶えながら涙声を張り上げる。もうパニックだった。ぎゅっと目を瞑っておでこを押さえたままうつ伏せに丸まっていると、Tシャツの襟をぐいと後ろに引かれた。

「ここだよ。まったく停電ぐらいでバカみたいに騒ぐなよな」

呆れるほど冷静な聡太の声が、大音量のテレビのノイズみたいな
雨音を割った。

「早く……電気つけてよお〜」

「そのうちつくよ。雷がおさまれば」

襟首をつかまれたまま、あたしは暗闇でじわつと滲んだ涙を両手
で拭った。心臓がバクバクいつてる。……寿命が縮みそう。さつき
の瞬間であたしは持てる力を使い果たしたかのように脱力してしま
っていた。

「なに、泣いてんの？」

にやついた声が暗闇の中で訊いてくる。あたしは鼻を大きくすす
った。

「泣いてない！ ちょっとびっくりして鼻水が出ちゃっただけだも
ん」

「きたねえなあ。弱虫、透子」

聡太がソファから降りた音がした。ふわりと温もりが漂ってきた。
「ティッシュ、どこだっけ」

聡太が動いたたびに、背中と背中が軽くぶつかる。触れた場所に体
温の跡がじんわりと残っていく。

「……ねえ」

心を静めようと、あたしはゆっくりと息を吐き出した。

「寄りかかってもいい？」

「うん？」

聡太が体を起こした。背中がぴったりと重なる。あたしはそのまま
ま重心を聡太の背中に預けた。

あつたかい……。

熱いお湯に沈んでいくように、体温が溶け合っていくのを感じた。
ほとんど変わらない同じ温度。ゆっくりと大きく深呼吸すれば、
瞬く間に安心感が弛緩した身体中に広がっていく。

不思議。

人の体温でこんなに安心するものなんだ。さっきの雷のせいで彗星のごとく落ちてきた大きな恐怖心のかたまりが、ゆっくり溶けていくような気がした。

「重い。押し潰すなよ」

聡太がわざと背中を押し返してくる。けどそれは一度だけで、あたしの重みを受け止めてじっと座ったまま黙り込んだ。

風にあおられた強い雨がガラスを叩く。大ホールに湧いた拍手みたいにな、盛り上がったたり弱まったり。

「ねえ」

膝をたてて両手を回し、あたしは自分の温度を抱き締めた。聡太の背中がかすかに動く。

「なに？」

「さっきなんて言ったの？ 雷が落ちる前」

「……………」

呆れたようなため息が聞こえた。

「……バカ透子」

「なんだって？」

どん、と背中聡太に体当たりする。バカバカって言うな。

「姉弟になったからって、ただそれだけの理由で似るわけないだろ」

お返しがくると思ったのに、聡太の背中が静止したままだった。怒っているのか、声がだんだん低まっていく。

「血の繋がりはないんだから。オレは」

チカッと蛍光灯が点滅した。

「透子のこと、姉さんだなんて思ってないから」

電気がついて、ぱっと部屋の中が明るくなった。聡太の背中の温もりが離れる。立ち上がり、何事もなかったかのように部屋を出て

行く。

なんで……？

一瞬シヨックで血の気がひいた。

言い捨てられた最後の一言が、頭の中をぐるぐる駆け巡る。

どういふこと？

今度は顔がかあつと熱くなる。

存在を、否定されたような気がした。

DVDが消えて、深い洞窟みたいに真っ黒なテレビ画面が涙で滲んだ。

雷鳴を追い払うように、大粒の雨の音は一層激しく雨戸を叩き続けていた。

【第七楽章】 戸惑い

翌日も美香は学校に来なかった。

昨日別れ際に「明日は行くよ」なんて言ってたのに、いい加減なもんだ。

しかも連絡もない。てつきり来ているものだと思って、お弁当ぶら下げて迎えにいったのにクラスの子に「今日は欠席だって」と言われた。

一言メールくらいしてくればいいのに……。

学校に連絡する余裕があったなら、出来たんじゃないの？

少しむかむかしながら、あたしは自分の教室に戻った。今日は昼練があるけれど、二十分余裕があるから一緒にお昼を食べようと思っただ。

「あれ？ 咲ちゃんどしたの」

席に戻ると、田崎くんがいた。いつもはチャイムと同時に大あくびして、パンをくわえてのそのそと昼練に行くのに珍しい。

「美香、今日も休みなんだって」

「あいつ、またサボリ〜？ いいご身分だねえ」

はははと田崎くんが笑う。 田崎くんは今日二限の途中に来た。

「一人で食べるの？」

あたしが広げ始めたお弁当を田崎くんが覗き込む。

「うん。今日は昼練あるから、さっさと食べちゃわないと」

クラスの女の子たちはほとんどがお弁当組で、みんな机を集めていくつかのグループになっっている。声をかければ入れてくれるかもしれないけど、面倒くさいからいいんだ。

お弁当箱を開けていただきます、とあたしは箸をとった。

今日は昨夜の残りってわけにいかないから、おかずは冷凍食品の

オンパレード。正直なところ、ラッキーだ。

「それ、お母さんが作ってくれるの？」

パックのコーヒー牛乳のストローをくわえながら、田崎くんがあの欲しそうな目でこっちを見ている。机の上にパンの空袋が三つあるけど、足りなかったんだろうか。

「冷凍食品だけだね。ねえ、部活行かなくていいの？」

「うん……行くけど」

あいまいに答えてがしがしと後頭部を掻くと、田崎くんは机の上に長い足を上げて椅子を後ろに傾けた。

もしかして、気を遣ってくれてるのかな……。

一人で食べるのがちょっと寂しいって思ったの、気付かれたのかもしれない。田崎くんは口には出さないけど、結構観察眼が鋭い。こうやってさりげなく気を遣ってくれたりするんだよね。

『コアラちゃん、あんたのこと好きなんだよ』

美香の言葉を思い出す。

だからあたしに優しいって？ そうかなあ……。

田崎くんが優しいのはみんなにだし、それとあたしに対する態度は特別差がない気がするんだけど。

「じつはさあ……」

後ろの机に寄りかかってバランスをとりながら、田崎くんが言った。

「なんか腹の調子悪いんだよね。食欲はあるんだけど。だから昼練行きたくないな」なんて

白い歯を覗かせて、はははと笑う。

「怒られるよなあ……うおっ!？」

田崎くんが重心を預けすぎたせいで、後ろの机ががたと揺れた。

あやつく後ろにひっくり返りそうになって、田崎くんは慌てて体を跳ね起こした。

……やっぱり、美香の気のせいだ。

ちょっとだけ想像してときどきしちゃったあたしの一瞬を返せ。黒板の上に掛けられた時計の針がカチリと動いた。こんなことしてる間にもう七分も過ぎてしまった。

田崎くんに見えないようにそつと顔を背けてため息をついて、あたしはお弁当を食べる手を早めた。

「アルト、ちょっと強すぎ。もう少しおさえて、ちゃんと他の音聞いて」

器用に注文を挟みながら、結理先輩が指揮棒を振る。

総勢三十名の作り出す三つのハーモニーが、音楽室を満たしていく。

開け放たれた窓へと誘い込まれた夕暮れの風が、茜色に染まる白のカーテンをふわりと揺らした。

軽やかに動く指揮棒に導かれるままに、あたしは鍵盤でメロディを奏でていく。

ああ、やっぱり気持ちいいな。

少しずつ変化を繰り返して、皆の歌声が溶け合っていく。気持ちの一つの場所に向かって、真っ直ぐに伸びていくのがわかる。

全員の気持ちが一つになって曲が完成していく瞬間が、たまらな

く好きだ。伴奏というポジションにいとその変化がよくわかる。そして、やっぱりピアノが好きだと実感する。複雑な思いを感じることがあっても、自分の一部みたいなものだ。

「よし、揃ってきたね。本番まであと三週間あるけど、気を抜かないでいこう！ じゃあ今日はこれにてかいさーん」

結理先輩の掛け声に、皆おのおの同意の返事をして帰り支度を始める。

あたしはグラランドピアノの前に座ったまま、譜面台の楽譜をめくって一番最初のページに戻した。

「咲ちゃん、まだやってく？」

新体操のリボンみたいに指揮棒をくるくる回しながら、結理先輩が近くにやって来た。

結理先輩は本当はソプラノパートだけど、顧問の柳田先生がいない時は代理で指揮をとっている。でも最近、指揮棒を振るのにハマっているらしい。

「はい、もう少し練習していきます」

あたしは頷いた。家だと練習出来ないから。

それにグラランドピアノって、見た目も音も家にあるアップライトピアノよりもゴージャス。鍵盤に重量感があるけれど、音の繋がりがなめらかで弾き心地がいいんだ。滅多に触れないものだから、思う存分弾きたいというのもある。

「そっか。じゃあ戸締りお願いしてーい？ あたしこれから予備校なんだ」

部員のみながそろそろと教室から出て行くのを一瞥して、結理先輩はピアノの譜面台の横に音楽室の鍵を置いた。

「はい、わかりました」

いつもたいてい戸締りは部長の結理先輩が、居残り練習をするあたしの役目になる。他の皆は練習が終わると、案外あっさり帰ってしまうのだ。コンクールが迫ってくると燃え始めるんだけど。

「熱心だね。もう完璧に弾けてるじゃない？」

「うーん……でも心配だから。伴奏のミスって結構皆の気持ちに影響すると思うし」

「偉い！ 頼りにしてるよ、縁の下の力持ちさん。咲ちゃんがいればうちの部も安泰だね」

あたしの肩を軽くぽんぽんと叩くと、結理先輩は指揮棒をブレザーのポケットに差した。

「でもあんまり遅くならないうちに帰るんだよ」

「はい、また明日」

カバンを肩にひっかけ、じゃあねと手を振ると、結理先輩は小走りに教室の扉に向かって走り出した。けれどその途中で「あ」と声を上げて立ち止まった。

「窓も忘れずにお願いな。ほら、桜の花が風に乗って入ってきてきちゃうから。去年教室が花びらまみれになって怒られたの」

もう一度じゃあねと言つて、長い黒髪が翻った。

緩やかな波を描くカーテンの向うから、梢の揺れる音がした。

誰もいなくなった教室が、茜色と夜を導く紫色のグラデーションに沈んでいく。

夕闇のにおい乗せた空気を吸い込んで、あたしは両手を白い鍵盤に乗せた。

音楽室の戸締りをして校舎を出た時には、辺りはすっかり暗くなっていた。

運動部の練習も終わり、グラウンドでは後片付けが始まっている。校庭の脇に立っている大時計は、もうすぐ七時を差そうとしていた。

すっかり練習しすぎちゃったな。

課題曲の伴奏はもう完成しているから、そんなに必死に練習する

ことはないと思う。でもグラウンドピアノを前にすると、どうしても離れるのがもつたいたいと思ってしまう。なんだか、ピアノに恋をしているみたいに。

他の部活動の生徒たちに紛れて校門に向かいながら、あたしは肩にかけた鞆から携帯を取り出した。

二つ折りの電話を開いてメールの確認をする。だけど煌々と光を放つディスプレイには、メールがきたことを示すアイコンはなかった。

もう、何してんのよ美香ってば。

昼休みに一回と、部活前に一回美香にメールを送った。でもまだ返事はきていなかった。

いつもなら、遅くても一時間以内には返って来るのに。メル友とか他校の友達が多い美香はいつもまめに携帯を見ているから、気付いていないはずはないのにな。

人が本気で心配してやってんのに。

どこまでのんきなんだろう。

きつと明日謝ればいいや、とか思ってるんだ。美香が休むたびにこっちは留年しないかひやひやしてるっていうのに。友達甲斐のないやつ。

明日会ったら説教してやるんだから。

そう決めて、あたしは携帯をブレザーのポケットに押し込んだ。

「おーい、咲宮〜」

校門を出ようとした時、後ろから間延びした声に呼ばれてあたしは振り返った。暗闇の中から田崎くんが駆け寄ってくるのが見えた。

「おつかれー。今帰り？」

重そうなスポーツバッグを肩に担ぎなおし、田崎くんがよう、と手を上げた。

「おつかれ。サッカー部も今終わりだったんだ」

「うん。出てきたのが見えたから追いかけてきた」

近付いた途端、もあつとした空気を感じた。

練習でほてった体からまだ熱気が抜けていないんだろう。ズボンの上にだらりと出したシャツの襟元をぱたぱたと動かして、田崎くんが「あちー」と星の見え始めた空を仰ぐ。急いで着替えたのかネクタイは首に引っ掛けただけで、ブレザーのボタンも開いたままだ。「駅まで一緒に帰ろうぜ」

そんなだらしない格好をしても軽薄そうに見えないのは、息を弾ませた笑顔が爽やかすぎるせいだろう。美香の元彼の中にも「いつそ着なければいいのに」と思うくらい制服を着崩すタイプがいたけど、浅黒い肌と金に近い茶髪の遊び人風だった。エナメル質な白い歯をのぞかせて愛想をふりまかれても、嘲笑われているような気がして好感が持てなかった。服装って着る人によってどんな印象にも変わる。

「うん、いいよ」

そう頷いた時、後ろからはやし立てるような声が聞こえた。田崎くんと同じバッグを下げた集団がこっちに向かって「田崎く、それカノジヨ?」とか「ぬけがけすんなよ、お前」とか騒いでいる。

「うっさいよ」と一言だけ投げて、田崎くんはあたしに行こうと促した。

「いいの? ヘンな噂たてられちゃうんじゃない? 運動部ってそういうの敵しいんでしょ?」

のんびり歩き出した田崎くんは歩調を合わせながら、あたしは背後からがやがや来る部員達をちらりと見遣った。

「いいの、いいの。言わせとけば。いちいち相手にしてたら余計からかわれるし。人の噂も十五日」

「……短すぎだから。七十五日じゃなかったっけ?」

あはーそうだっけ、と歩き方と同じゆったりとした口調で田崎くんが小首を傾げる。ついでというように大きなあくびをする様子は、ユーカーをおなかいっぱい食べてくつろぐコアラみたいだ、確かに「あ、でも」

追いつかれると気まずいな。そう思っただけで自分の速度を止めると、ほんペースを脱出しようと考えていると、田崎くんがあたしを見た。

「咲宮が嫌っていうなら、ちゃんと言い訳はしとく。俺は全然いいんだけど」

“いい”って？

あたしはちよつと戸惑った。田崎くんの声と顔付きが、急に真剣な様子に切り替わったから。

さっきまでのゆったり流れる雲のような雰囲気とはまるで違って、やけに男っぽく感じた。

「……あたしは、べつに」

速めようと踏み出した足からふっと力が抜ける。急いでいた気持ちに急にしぼんだ。

「田崎くんが平気なら、いいよ。たいしたことじゃないしね」

外灯の明りが落ちるアスファルトの上、急ぐのを躊躇う足元を見ながらあたしは言った。

『俺は全然いいんだけど』

答えを迷った。

何気ない田崎くんの一言が、あたしに緊張を与えた。たいしたことじゃない。難しくとる必要なんてないのに。

でも、いつものあたしたちの間にある空気が、皺を伸ばしたシー

ツミたいにピンと張った肌触りに変わったような気がしたのだ。

「そか。ならいーか」

少し離れたところにいる部活仲間を一瞥して、田崎くんはあたしににっと笑いかけた。いつもの彼だった。気にかかる様子はなかった。あたしはほっとする。

告白されたわけじゃないんだから。

どきどきするなんて変だ。田崎くんのこと恋愛対象に見たことなんてないのに。

さっきの言葉は“からかわれるくらい何でもない”っていう意味だ、きつと。なに勘違いしそうになっているんだろう。

「じゃあ」駅前に来たところで、田崎くんがふいにあたしに手を差し出してきた。

「手えつないでごうか」

「はっ？　なんで？」

「仲良しぶりを見せ付けてやんの。どうせならこっちがいじってやるうよ」

「えーっ、やだよ！　なんでこっちから煽るわけ！？」

「いいじゃん、あいつらバカだからすぐ食いつくよ。あれ？　なに咲ちゃんテレてんの？　かーわいい〜」

「わー触るなっ！」

ああ、やっぱり気のせいだ。

否定したら何か壊れるかもしれない、なんて考え損だ。

改札へ向かう階段を昇りながら伸びてくる田崎くんの手をはたいていると、同じ制服姿の男子学生があたしの横をすり抜けた。そして二三段先上がったところであつとこちらを振り返った。

「あ」

目が合ったと同時にお互い声があがる。鼓動がゴム鉄砲で弾かれたように跳ねた。

「聡太」

真新しいブレザーとネクタイが馴染み始めた聡太が、きよとんとした表情で立っている。田崎さんの袖を押えていた手をあたしはとっさに離れた。

「あ、咲ちゃんの弟くんじゃん。こんちわーッス」

なんとなく気まずい遭遇に言葉を探していると、田崎くんが先に口を開いた。

田崎くんに軽く頭を下げ、聡太はあたしを見た。説明を求めるような目で。

「クラスメートの田崎くんだよ。サッカー部の。こないだ話したでしょ」

「……ああ。どうも、はじめまして」

テンションは低いけど、今度はさっきより丁寧に聡太はお辞儀をした。人前でくらい愛想よくしろと言ってるのに、こいつはそういう気の使い方が出来ないやつなんだ。

「あんだなんでこんな時間にまだいるの？」

不思議に思ってたあたしは訊いた。聡太は部活に入っていないから、いつもあたしよりも先に家に帰っているはずだ。

「友達に会ってた。前に塾で一緒だったやつ。駅前のマックでちょっとしゃべってた」

「ママには連絡したの？」

「したよちゃんと。言われなくても」

聡太の口がへの字になりかける。すぐに戻したのは、外ではポーカーフェイスを気取りたいからだろう。

「そっか、ほんとに姉弟なんだな二人って」

あたしたちのやり取りを見ていた田崎くんが小さく吹きだした。

よく意味がわからなくて聞き返そうとした時、階段の上り口付近がざわめいた。コンビニの袋を下げた集団が昇ってくる。あたしたちの後ろにいたサッカー部員たちだ。

「行こう、透子」

避けたい衝動が沸き起こったあたしに、聡太がぶつきらぼうに言った。え、と目を瞠って見上げれば、すたすと階段を昇り始めている。

「じゃあ俺、あいつらと行くよ。咲ちゃんとは電車逆方向だしね。んじゃ、また明日」

田崎くんがぼん、とあたしの肩を押した。

申し訳ない気分になって「ごめんね」と続けようとしたけど、からかい交じりの呼びかけに応じて田崎くんは下に降りていつてしまった。

遠ざかっていく聡太の背中めがけて、あたしは上へと駆け上がった。

「ちょっと、なによあの態度！ 田崎くんに失礼でしょ」

階段を昇りきったところで追いついて、あたしは聡太の横に並んだ。

「そう？ 挨拶はしたじゃん」

しれっとした涼しい顔で聡太が答える。

帰宅時間ということもあって、駅の構内は混み合っていた。駅に直結しているショッピングセンターから出て来る客も多い。改札に向かつて足早に人ごみを抜けていく聡太をあたしは小走りで追いかけた。

「田崎くんが気を悪くしたら謝りなさいよね。あなたにとっては先輩だよ？ 一年のくせにナマイキだって思われるよ。気をつけなさいよ」

定期入れを取り出し、改札機にかざして通り抜ける。

ズボンのポケットに両手をつ込んで、自分勝手にペースを上げていく聡太の腕をあたしは小突いた。

「ねえ、何いらついでんのよ」

気がたっている時はすぐにわかる。態度や表情から不機嫌がすぐにじみ出るからだ。

一見聡太は感情の起伏がなさそうに見えるけど、本当は理科で使うリトマス紙みたいに反応しやすい。不満があると、口には滅多に出さないけど顔色に出る。

「べつに」聡太が低くぼそっと呟いた。

「そっちだって、何ムキになってんだよ。」

あれ、透子の彼氏？

「はあ？」

ホームへ降りるエスカレーターに聡太が乗る。そのすぐ後ろにあたしは続いた。

「さっき言ったでしょ、クラスメイトだって。一年の時から仲はいいけど、そういうんじゃないよ」

「へえ」聡太があたしを振り返った。

何よ。

疑うような目付きで眺め、再び前を向く。

もしかして、さつき田崎くんとぶざけていたのを見たから誤解しているのだろうか。でもどうして、責めるような目で見られなくちゃならないの？ 聡太には関係のないことだ。

日に日に大きくなっていくように思える聡太の後ろ姿を、あたしは睨みつけた。

聡太は時々変だ。

昨日の夜だって意味不明なことを言ってたし、今日だって急にむすつとして

なんなのよ、あたしが何か悪いことをしたみたいじゃない。

前をふさぐ背中は何も言わない。けれどなんだか詰られているよ

うな気がした。

ホームに降りると、ちょうど電車がきますというアナウンスがかかった。

扉が開く位置を示す白線のところに立って、列車を待つ。苛立ちが押し寄せた。

「……難しいよ」

電車待ちの人々のざわめきの中で、あたしは呟いた。

「何？」

怪訝そうに聡太が訊いてくる。マフラーに口元を押し付けて、あたしは俯いた。

「何考えてるのかわかんないよ、聡太は」

発着時刻を映す電光掲示板のランプが、点滅と警告音を繰り返す。電車のライトが、重たい夜闇のトンネルをくぐり抜けてやってきた。

「難しくなんかないよ」

やけにはつきりと言いつつ放った声に、あたしは顔を上げた。すぐ横に聡太の整った横顔があった。

「簡単だよ、オレの考えてることなんか。透子が難しくしてるだけだ」

メトロノームの単調なリズムが、耳奥で鳴り響いた。

電車がホームに滑り込んでくる。

ブレーキ音が高く長く、目の前を行き過ぎた。

【第八楽章】 孤独

その日の夕飯は家族四人が揃った。

めずらしくお父さんが早く帰ってきたのだ。

フレックスタイムという制度が始まって、午後三時に上がれたらしい。お父さんの会社では過剰な残業をしないよう一ヶ月の労働時間を決めて、その枠内で稼働するために時々早帰りをして時間の調整をするんだそうだ。

「おかわりあるからねー」

ほかほか湯気のたつカレー皿を、一人一人の前に置いていくママの声はいつもよりも明るい。

お父さんは休日出勤が多い。だからこうして四人揃ってごはんが食べられるのは滅多にないことなのだ。

今夜のメニューはカレーライスとポテトサラダ、とみそ汁。

順番ではカレーは明日なんだけど、繰上げになったらしい。

「いただきます」

全員の皿が揃ったところであたしは先にスプーンを取った。隣の聡太がぼそりとそれに続く。

電車を降りた後、あたしたちはほとんど会話もなく縦に並んで帰って来た。

ホームでの聡太の不可解な言葉があたしは気になって仕方なかった。

でもすぐに混み合った電車に乗り込み、「どういう意味？」と聞くタイミングを失ってしまい疑問はそのままだ。

聡太もその後は何も言わなかったから、今となってはもう掘り返せない。

あれはどういう意味だったんだろう。

「ねえ、どう？ 今日のカレー」

自分の椅子に座って、ママがいつものように向かいの聡太とあたしを交互に見た。

「いいんじゃない」と頷いてみせて、聡太はばくばくとカレーをかきこんでいる。あたしも素直に「おいしいよ」と答えた。

ママのカレーは普通においしいと思う。

薄いとか濃いとか水加減の差はあるけど、味は結局市販のルーだから間違いはない。時々さつま揚げが入っていたり豆腐が入っていたりとちよつと勘違いしてる気配もあるけど、標準には達しているんじゃないかな。そんなママのカレーライスを聡太は「ごつた煮」と呼んでいる。

「よかった。今日はね、ルーの箱の裏に書いてある分量通りにやってみたのよ。いつもは適当なだけだね。ほら“いい加減が良い加減”って言うじゃない？ あら、ほんといつもよりもいいみたい。作り方くらい知ってるわよと思ってたけど、バカに出来ないわね」
カレーを口に入れたママの顔がほころぶ。

無邪気だなあ。

そのオリジナリティ溢れる水加減やさじ加減で被害にあうことも、しょうがないような気がしてしまう。

「ほら、洋次さんも温かいうちに食べてよ」

広げた新聞の向うに隠れているお父さんをママがつつく。「ん？」と白髪が混じり始めた頭をお父さんが上げる。そしてあたしたちを見回し、

「お、今日はカレーか」

そんなとぼけたことを言って、新聞を四つに畳んでテーブルに置いた。

「もう、ごはんの時はやめてよね。夢中になって全然片付かないんだから。新聞なんて一つで十分なのに三つも四つも契約して」

口調を尖らせながら、ママがビールの缶を持ち上げる。

お父さんは新聞を読むのが好きだ。出かけない休日の午前中なんかは日当たりのいいリビングの窓の側に座って、スクラップ用の記事を見繕ったりしている。もともと口数の多い人ではなく、むしろ一人でのんびり趣味に没頭しているのがいいみたいだ。

「見比べるのも面白いんだよ。お、ありがとう」

自分の持ったグラスにビールが注がれていくのを見て、お父さんがママにぺこりと頭を下げた。もうママはとつくの昔にホステスを辞めているのに、未だに客としての癖が抜けていなくて、お父さんは時々他人行儀にする。

「たまに家族全員揃った時くらい、皆で話をするもんよ。最近休日出勤多かったから久しぶりでしょ」

「ああ、そうだな……」ビールをおおひながら、お父さんがのんびりと相づちを打つ。そして聡太を見た。

「学校、どうだ聡太。もう慣れたか」

ふいに訊かれて、聡太がカレーを食べる手を止めた。お父さんの質問はいつも間が変なのだ。

「うん、ぼちぼちね。クラスの奴らとも仲良くなってきたし」

そう答えてまたカレーに戻る。今日の味はずいぶん気に入ったみたいだ。

「あ、そういえばクラス委員に選ばれた」

「え？　なんで？」

塩っ気の多いポテトサラダのきゅうりをつまみながら、あたしは思わず声を上げた。

「推薦で。その後多数決で勝手に決まった」

おかわり、と聡太が皿を持ち上げた。受け取ってママが立ち上がる。

「引き受けたんだ。仕事多いよー、うちの学校のクラス委員。自動的にイベント委員も兼任だから、運動会とか文化祭とかこき使われるし。面倒くさがるのあんたがよく引き受けたね」

「だから勝手に決められたんだって。しょうがないだろ。ま、部活とかやらないからいいけど」

聡太の肩が溜め息で上下した。

「でもいいじゃない、頼りになる存在だって思われたってことでしょ」

ピンクの縁取りのかまぼこが入った大盛りのカレーが聡太の前に置かれた。ほかほか立ち昇る湯気の向こうで、ママがうれしそうに笑う。

「面倒くさいけどね」あたしの方を見て肩をすくめ、聡太はカレーにスプーンを入れた。目が合った時に一瞬だけ冷めた表情を見たような気がした。

「みんな見る目あるじゃないの。まあ学年首位だもの、当然よね。頑張んなさいよ」

ママの声のトーンがあがっていくのがわかる。

クラス委員なんて、生徒からしたらただの雑用係、避けたい役職だ。でもママには興奮材料になるんだろう。

皿の上の大きなじゃがいもをあたしはスプーンで二つに割った。

あたしはあまりものの、防災委員。

「なんだ、部活入らないのか」

二杯目のビールを注いでもらいながらお父さんが訊く。350mlのビールを二缶飲み干さないとお父さんの食事は始まらない。

「うん、集団で何かやるのって好きじゃないし。強制じゃないよね？」

上目遣いに振られて、「うん、まあ」とあたしは答えた。

「どうせ毎日帰ってきて部屋に寝転がってるだけなんだからやれば？ サッカー部勧めたんだよ」

「ああ、学洋高はサッカーが強いんだっただな。入ってみればいいじゃないか。父さんは高校生の時部活のかけもちしてたぞ。運動部と

ギター部と…… そうだ透子と同じ合唱部でもいいんじゃないか？
聡太もピアノ弾くだろう」

なあ、とお父さんに同意を求められてあたしは思わず言葉につまった。薄暗くて重たい気持ちの下からじよじよに押しあがってくる。

「もうやらないのか。最近聞かないな」

「うん」

はつきりと頷いて、聡太はグラスのウーロン茶を飲んだ。

「もともと聡太は透子の真似して始めたただけだったものね。でもピアノは女の子の楽器っていう感じだもの、もういいでしょ。それよりサツカーの方がかっこいいわよ」

みそ汁椀を片手にママが小さく首を横に振った。

そこまでしなくてもいいのにと思っくらいママは嫌なものの話をする時は表情に出る。ほんと聡太みたいだ。

「昔はよく二人で連弾してたわよね。まったくよく飽きないもんだと思っただわよ。でも始めた頃は大変だったわよねー。聡ちゃんてば出来ないってわんわん泣いて」

「…… そうだっけ？」

「泣いてた泣いてた。その度に先生がアメもらって止まるの」
じろりと聡太が睨んでくる。あたしはわざと歯をみせて笑ってやった。

「でも途中で透子を抜いちゃったのよね、確か」

「明るい調子でママが言う」

「青いバイエルの時だっけ」

鋭くて速い風のようなものがあたしの中を通り抜けた。

口の中に入れたじゃがいもをあたしはぐつと噛みしめる。

「透子、ウーロン茶飲む？」

急に聡太が立ち上がった。さりげなく、絶妙なタイミングで。

冷蔵庫からウーロン茶のペットボトルを取り出してきて、赤と青のラインのグラスに注ぐ。

「……ありがとう」

もそもそするじゃがいもを飲み込んで、あたしは呟いた。透明で茶色い液体の表面に、天井の白い蛍光灯の明りが浮かんでいる。

気づかれた？

焦りに飲み込まれそうになったことに。

なんで聡太はわかるの？ あたしが手を差し伸べて欲しい時が。平気な顔をしているはずなのに。

そして訴えてくる、何も言わずに

時々、時限爆弾のようなどきりとする言葉を、そつとあたしに渡して。

「聡ちゃん、おねえちゃん”て呼びなさいって言ってるでしょ」

急に母親の声になったママが聡太を咎めた。

「なんで？」

「透子の方が年上なんだから、呼び捨てなんてやめなさい」

「たったったっこ違いじゃん」

反抗的に聡太がママをじつと見据えた。

あ、空気が悪くなる。とっさにあたしは口を挟んだ。

「いいよ、ママ。あたし気にしてないし、今さらおねえちゃんなんて呼ばれたってキモイしさ」

「だめよ」

鋭い否定にあたしは驚いた。

ママは怖いくらいの真顔だった。

この顔をあたしは知ってる。

聡太が高校を決めた時と同じだ。

でもそれは一瞬で、はっとしたようにママは瞬きを繰り返した。
「いいじゃないか、好きにさせたら」

ようやく箸を動かして始めたお父さんが、何をむきになってるんだとママをたしなめる。

「だって、なんか大人みたいなんだもの。まだ十五歳なのに」

かわいくないじゃない、とママがむくれる。さっきの棘立った空気がもうなかった。

「オレは大人だよ、中身はずーっと」

カレーが半分残った皿にスプーンを下ろしたまま、あたしはぼんやりとみんなの食事の音を聞いていた。

「ね、透子おねーちゃん」

ほくそ笑みながら覗き込んできた聡太を、あたしは「ふざけんな」と押し戻した。

笑いが乾く。

さっきのママの凍りついたような顔が、頭の中から離れない。メリーゴランドみたいにくるくるぐるぐる。

あと少しママが我に返るのが遅れたら、あたしは泣き出していたかもしれない。

なんて窮屈なんだろう。

家族団欒で、こんなに疲れるものなんだろうか。

あたしの内側から樹皮のようにぼろぼろと剥がれ落ちたものが、硬いおはじきが変わっていく。

弾けない、おはじき。消せずに積み上がっていくだけの。

それでもあたしは喉を渴かせたまま笑うんだ。

まだ大丈夫、そんな風に思いながら。

【第九楽章】 裏切り

美香のお父さんが亡くなったと聞いたのは、翌日の一限後の休み時間だった。

結局今朝になってもメールの返信はなくて、あたしは隣のB組に美香が来ているのか見に行った。その時、一年の時に一緒のクラスだった女の子から聞いたのだ。

『鈴木さん、昨日お父さんが亡くなったんだって』

お昼休みにあたしはすぐにB組の担任、安西先生のところ求真偽を確かめに言った。

話は本当だった。

美香のお父さんは半年ほど前から入退院を繰り返していて、昨夜病院で息を引き取ったそうだった。

末期ガンだったそうだった。

今夜お通夜があるので先生は行くという。

予鈴が鳴ったので、あたしは職員室を後にして教室へ向かった。

足はちゃんとリノウムの床を踏んでいるのに、歩いている気がしない妙な気分だった。

窓の外は快晴、春の陽気で満ち溢れているのに、手先が真冬の朝のように冷たい。

なのにマラソンのスタート一分前みたいに胸がどきどきして仕方なかった。

知らなかった。

美香のお父さんが病気だったこと。それも危篤状態だったなんて

だからメールの返事がなかったのだ。

五限前のざわめいた教室に戻り、自分の席にすくとんと腰を下ろした。頭の中が整理出来なくて、呆然としてしまう。

「アンジ、なんだって？」チャイムが鳴ったと同時に戻って来た田崎くんが、荒い息遣いのまま訊いた。

「大丈夫？ 顔色悪いけど……」

覗き込まれてあたしは我に返る。だけどうまく表情を取り繕えなくて、俯き加減に頷いた。

「……昨日亡くなったんだって、美香のお父さん。今日お通夜だつて」

自分が今どんな顔をしているのかわからない。激しく動揺しているのだけはわかる。冷静になりたいのだけれど、体が震えそうになつてあたしは机の下で手を握り締めた。

「鈴木から連絡ないの？」

「……ない。何度かメールしたんだけど。電話もしたけど出なかった」

「お通夜いくの？ 咲ちゃん」

「わかんない……どうしよう、行っていいのかな？ だってあたし、美香から何も聞いてないんだよ」

何一つ。

美香はそんな素振りさえ、見せなかった。

勘ぐらせる余地も与えなかった。

あたしは美香にまんまと騙されていたのだ。

「俺だつて何にも知らなかったよ。水くさいよな、あいつ。咲ちゃんが行くなら俺も行くよ。アンジに頼めば、二人くらい乗っけてくれるよ」

アンジーこと安西先生は一年の時のあたしたちの担任だった。確

かワンボックスカーに乗っていたから、便乗させてもらえるかもしれない。あたしは田崎くんの言葉で迷いを振り切った。

「うん、行く。頼んでみよう」

美香のところに行きたい。少しでもいいから直接話がしたい。

「じゃあ五限終わったら言いに行こう」

田崎くんがそう提案した時、教室の前の扉が開いて生物の片野先生が白衣姿で入ってきた。

あたしはぐつと奥歯を噛み締めた。

放課後、安西先生の車に乗ってあたしは田崎くんと一緒に市の葬儀場へ向かった。

田崎くんは便乗を頼みにいったついでに、サッカー部の顧問に休むと伝えに行つたみたいだった。

「大丈夫なの？」とあたしが訊くと「平気平気」と軽い調子で答えただけど、本当はあたしが決めかねていたから背中を押してくれたんだと思う。

だってどんなに具合が悪くたって、補習で時間が押したってあたしが知ってる限りでは田崎くんは練習を休んだことはない。運動部は上下関係が厳しいっていうから、いけないことなんじゃないだろうか。

心配になって「ごめんね」とあたしが言つと、田崎くんは「全然」と少し大人びた顔で笑ってみせた。何が？と訊かないあたり、あたしの気持ちを察したからに違いない。でも田崎くんが引つ張ってくれて、よかった。

午後六時半を回り、取り巻く世界はどっぷりと夜に浸かり始めて

いた。

葬儀場の入り口にはたくさんの方の喪服を来た人たちがいた。読経と線香のにおいが中から漂ってくる。日常の中にはない異質な空気感だった。

お通夜やお葬式は初めてじゃない。

お母さんの時は小さかったからよく覚えていないけど、お父さん方のおじいちゃんが亡くなった時のことは、小学校高学年だったからちゃんと覚えてる。

お葬式には今日のようにたくさんの方が来ていて、知っている顔もまったく知らない顔もあった。全員一様に真っ黒な服を着て、まるで死神みたいだと思った。ひそひそ肩を寄せ合って話をしている様子がなんだか不気味で怖かった。おじいちゃんを連れて行く相談をしているように見えて

それがあたしの勝手に作り出した妄想だってことはわかってるけれど、恐ろしさと同時に憤りも感じそうになったのを思い出す。

「黒でよかったな、制服」

記帳している先生を待ちながら、田崎くんが言った。

安西先生は喪服に着替えたけど、あたしたちはそんなものないの制服で来た。お通夜は黒服じゃなくても大丈夫だっていうけど、やはりこういう場では浮いていないか気になってしまう。

美香はどこにいるんだろう。

そう思ってあたしは首を巡らせる。すると、同じ学洋高校の制服を来た女の子三人と一緒にいる美香を見つけた。

見覚えがある、チア部の子たちだ。三人の顔をくまなく見回して頷きながら、美香は何かを話している。そして三人が焼香に向かうと一人になったので、あたしは美香のところに駆け寄った。

「美香」

少しびっくりした様子で美香が振り向いてあたしを見、そして後ろから来田崎くんを見た。

「来てくれたの、田崎も」

美香はワンピースの喪服姿だった。

いつもてっぺんでよくおだんごに結っている髪は今日は低い位置でまとめて、いつも力を入れてるアイメイクどころか化粧ひとつしていない。格好だけでもいつもと別人みたいに見えた。

「ごめんね、ありがとう」

よそ行きの口調で美香が言った。

顔が青白い。控えめな照明のせいかもしれないけど、寝不足のようにげっそりした様子だ。いつもの天真爛漫な美香の面影のない、生気のない顔だった。

「先生も、ありがとうございます」

記帳から戻って来た担任に頭を下げて少し言葉を交わし、美香は慌しくまた後で、とその場を離れた。

「 忙しそうだな。……そりゃそうだよな」

黒い着物を着た女の人 お母さんだ、のところに戻った美香を見送りながら田崎くんがぼそつと呟くように言った。

「うん……」

仕方ない、わかってる。だけでもやもやしていた。

あたしは今、すごく嫌な顔をしているんだろう。

お焼香にいこうと先生に言われ、あたしたちは葬儀場に並べられたパイプ椅子の間を進んだ。

ぼろぼろと、あたしの中ではがれたものが幾つもの硬いおはじきに変わった。

焼香をすませて、あたしたちは外に出た。

先生は美香のお母さんに挨拶に行ったので、その間入り口で待つ

ていることにした。

「なんか」

弔問客が出入りを繰り返す扉を見つめて、田崎くんぼんやりと言った。

「ごついうのって、どうしたらいいかわかんないな。さつき鈴木が来た時、何も言えなかった。「ご愁傷様」で軽く言うのも違う気がした。あいつ、やたら気張ってる感じがして」

あたしも同じだよ。

入り口付近の壁にもたれかかって、あたしは寒さを感じて巻いたマフラーに顎を埋めた。

「俺、葬式って一度も出たことないけど、遺影見ながらさつきちよつと考えちゃった。もし親父が死んだらって うまく想像出来なかったけど、想像出来なくらい辛いよな、きっと」

田崎くんも、さつきの美香に違和感を感じたんだろう。

美香の目に涙の跡はなかった。てっきり泣いているかと思ったのに、赤くなった様子もなくて。でも無理をしているような気はした。「……うん、そうだね。つらいと、思う。あたしもお母さんが死んだ時、どうしていいかわからなかった」

おぼろげに覚えている。

お葬式の時あたしは多分泣かなかった。

でもしばらくして「もうお母さんに会えないんだ」とふと気付いた時、悲しくて仕方なかった。

「毎晩夜泣いてたような気がする、ふとんの中で。自分の一部がなくなつたような気がして」

「……お母さん亡くなったの、小さい時だったんだよね？」

「うん、だからあんまり覚えてないんだ。今はもう、新しい家族も出来たし立ち直ったけどね」

月日が流れるうちに、お母さんの死はあたしの中で穏やかなもの

になった。

だけどあの時感じた痛みだけは忘れない。
ずっと消えない傷のように刻み込まれている。

「透子、田崎」

駐車場で交差する車のクラクションに気をとられて顔を上げた時、名前を呼ばれた。振り返ると、手に数珠を持った美香が立っていた。「今日はほんとわざわざありがとうね」

頭を下げられて、田崎くんは「いや……」と視線を上げ下げしながら首の後ろを掻いた。

「来てよかったのか……わかんないけど」

「ううん、そんなことないよ。部活休んで来てくれたんでしょ。透子もありがとね、それしか言えないけど」

「いいよ、とあたしは首を横に振った。でも毛玉みたいなもやもやがそれで終わりにさせてくれなかった。

「でも、どうして一言も言ってくれなかったの？」

美香があたしを見た。

そして田崎くんに「ちよつとごめん」と両手を合わせ、あたしの腕を引いて駐車場の脇にある植え込みの近くへ連れて行った。

「言わなかったのは悪いと思ってるよ。ほんとにごめんね」

素直に美香が謝る。入り口からもれてくる薄明かりでしかわからないけど、真剣な顔付きだった。

「……ちよつと嫌な気分だったよ、B組の沢井さんから初めて聞いて。美香、あたしに何も言ってくれなかったから」

「……安西とチア部の部長とかにしか言っただけなんだ」

美香はもう一度ごめんねと言った。でもたった一言“ごめんね”で済まされてしまうのはしゃくだった。

「あたしたち、友達でしょ？ 美香よくあたしに言うじゃない、悩みがあつたらいつでも相談しなつて。それはあたしも同じだよ？」

そりゃあ聞くことしか出来ないけど……、ちょっとくらい頼ってほしかったよ」

親友なら。

なんでも言えるのが親友なんじゃないの？

楽しいことだけじゃなくて辛いことも悲しいことも、分かり合える仲間じゃないの？

美香はあたしとの間に線を引いていたんだ。あたしのことには踏み込んでくるくせに、自分のところには入れないように。

そんなのずるい。

「ショックだった。あたしって信用できないのになって。美香はあたしに本音で接してくれてなかったんだね」

「そんなつもりじゃないよ、ほんとに」

「じゃあなんで隠してたの？ 水くさいじゃない。あたしだってお母さんをなくしてるから…… 気持ちわかるよ。軽く思ったりしない」
こんな状況で吐き出すつもりはなかった。けれど、さつさもやもやをさつさと外に出したくて、あたしはその欲求に従ってしまっ

た。
「裏切られたような気がした」

美香が俯いた。いつもは絶対にこんな落ち込んだ素振りを見せない美香が。沈黙の圧力の中で、あたしが言い過ぎたことに気付いた時、美香が「じゃあ」と声を震わせた。

「透子は言える？ “もうすぐお父さん死んじゃうの”なんて。 “もう助からないんだ”なんて。隠してたわけじゃないよ。口に出すのが怖かったんだよ。言った分だけ、本当にそうなっちゃっうんじゃないかって。少しでもまだ大丈夫だっと思いたかったんだもん」
潤んだ美香の目が車のライトに反射した。あたしは息をのんだ。

「簡単にわかるなんて言わないで」

叩きつけられた言葉にあたしの全身が硬直した。

ひんやりとした冷たい夜風がかすめていく。

美香はあたしの脇をすり抜けて行ってしまった。

足元を蠟で塗り固められたみたい動けなくて、あたしはその場に呆然と立ち尽くした。

【第十楽章】 後悔

“ごはんは？”というママの問い掛けに振り向きもせず、あたしは二階への階段を駆け上がり、部屋に引きこもった。

電気をつけないまま、カバンを放り出しフロアリングの床に座り込む。そして膝を抱えてうずくまった。

サイアクだ、あたし。

罪悪感と自分への情けなさでいっぱいだった。今日ほど自分が嫌になったことはなかった。

『透子は言える？』

美香の言葉を聞くまで、あたしは百パーセント被害者のつもりでいた。責めたつていいと思っていたのだ。

先生に駅まで送ってもらい、田崎さんと別れて電車に乗った後家路をとぼとぼ歩きながら、涙があふれてきた。

泣くのをこらえていた美香を思い出して。

どうしよう。

あたしはひどいことを言ったのだ。美香の気持ちを知らないで。どうして今まで美香が遅刻していたのかも知らないで。

遅れて登校した彼女をいつもあたしは叱っていた。そのたびに「だって面倒なんだもん起きるの〜」なんてのんきにむくれる様子に呆れたりして。

でも美香が欠席や遅刻ばかりしていたのは、寝坊したからでも遊びに行っていたからでもない。

お父さんの入院する病院に行っていたのだ。

そういえば美香の話題の中にお母さんの話はあってもお父さんはなかった。気に留めてもいなかった。もしかしたら私が切り出せば、美香は話してくれたかもしれない。気付いてあげられたらよかった。自己嫌悪の波が押し寄せる。後悔してどうしてこんなにとめどないんだろう。

「透子？」

背後でノックとドアの開く音がした。パチンとスイッチが入って部屋の電気がつく。

「ごはん、食べないの？」

聡太の声だ。泣き濡れた顔を膝にうずめたまま、あたしは鼻をすすった。

「……あっち行ってよ」

「どうしたの？」

「なんでもないよ。ほっといて」

「だって……なんで泣いてるの？」

「……うるさいな。ほっといてっば！」

きつめに言い放ちあたしは両腕を抱き寄せた。涙腺がゆるむと制御の糸をすべて手放してしまいそうになる。ぎすぎすした負の感情が勝手に増殖してしまう。

少し沈黙があってドアの閉まる音がしたので、何も言わずに聡太は出て行った、と思った。

「よいしょ」

けれどももう一度ずず、と鼻水をすすった時、掛け声とともに背中に温かいものが触れた。

聡太の背中だ。

「何か、あつたんだろ？」

丸まったあたしの背中を中心に、聡太の体温が押し付けられた。

「誰かにひどいことでも言われた？」

迷子の子供に問い掛けるみたいに、聡太が訊いてきた。

「言ってみなよ、聞くから」

反則だ。

聡太はいつもこう。

見て欲しくない時に限って側に来て、弱っている時に限ってあたしが欲しい言葉をくれる。強がりたいて、見せたくない、そんなあたしの我慢を見つけてちっぽけなプライドを突き崩してしまう。

きれいに片付けようとすればするほど、おはじきをばら撒いてばかりいるあたしを知っているみたいに。

「……美香のお父さんが亡くなったの」

涙声をあたしは押し出した。

「美香って、透子の仲のいい友達？」

「そう……ガンだったんだって。でもあたし何も知らなかったの。

お父さんが病気だっていうことも、入院してたことも」

「その美香さんは透子に言わなかったんだ」

「……うん、親友だと思ってたのに」

毎日あたしたちは当たり前のように一緒にいた。学校では何かあると真つ先に報告があった。

あたしはもともと口数が多い方じゃないけど、美香は自分から色々質問をして話しやすいようにしてくれたり。あたしはいつも美香が失恋すれば、夜中まで電話でなくさめたりした。

お互いのことをちゃんと見ていた　そう思ってたのに。

「そっか。だから、ショックだったんだ」

心の声と聡太の言葉が重なって、じわりと涙が浮き上がった。

「……あたしは美香に信用されてなかったのかな」

「どうして？」

「だから話してくれなかったんだ」

「うーん……それは違うと思うよ」

聡太が低く唸る。大人の男の人みたいだった。

「仲がいいからこそ、言えないことだってあるんじゃないかな」

「……どういうこと？」

「余計な心配させたくないからだよ。一緒にいる時は楽しい顔した
いって思うじゃん」

「……そうなのかな」

楽しいだけって偽物のような気がする。お互い無理して頑張つて
みたいなの。

「じゃあさ、透子は美香さんのこと信用してた？」

「してたよ、……もちろん」

「じゃあ何もかも全部話した？ 透子が抱えていることも」

「……なによ、それ」

「しらばっくれるなよ。いつも透子が我慢していることだよ」

「……………」

真っ先に浮かんだのは昨日の夕食のことだった。なんとか全部食
べ終えたカレーの、もそもそしたじゃがいもの感触。

「ほら、あるだろ言っただけのこと。なんで透子は話さないの？」

その方がいいからよ。

ママは一生懸命やっている。わかっているから。

今ある家族の形を余計なことを言っただけで崩したくないから。

「透子は思っていることあんまり言わないだろ。美香さんもきつと、
一緒にいるならそういうのわかっていると思う。彼女はそれに対して
何か文句言ったことある？」

「……ない。相談しなよ、とはよく言うけど」
「ほら」

聡太があたしの背中を自分の背で押した。

「透子が話すのを、美香さんは待ってるんだよ」

膝の上からあたしは顔を浮かせた。

「待つてあげるのも思いやりなんじゃない？ 友達としての」

黙って待つことも。

何がなんでも内側に入り込んでわけてもらおうとするんじゃない。

……そうだ、そうなんだ。あたしはなんて自分勝手なんだろう。

美香ばかり責めて。

ごめんね、美香。

急に美香の笑顔がとつともなく懐かしくなつて、ぼろぼろ涙が流れた。

「あたし……嫌なこと言った」

両目を両手で拭つて、そのまま押さえた。これ以上あふれないように。

「友達だつてさ、全部知らなきゃ分かり合えないってわけじゃないと思うよ。長い時間一緒にいたつて近くにいたつて、乗り越えられないものもあるし」

「……なに、それ」

「教えないよ」聡太が笑う。「オレにだつて言いたくないことの一つや二つあるもん」

「聡太は……謎が多いよ」

「そう？」

わからないことだらけ。ちつとも弟らしくなくて、何でもわかつてるような顔して。

いつも負けてしまう。

あたしは自分のリズムを保つのに必死なのに、聡太のリズムはいつも変わらない。

「単純だって言ったじゃん。オレは何も隠してないよ」

雨の夜と同じように背中の中の体温が溶け合っていく。

あの時もあった。

人のぬくもりってどうしてこんなに落ち着くんだろって。

「透子が言えるようになったら教えてあげるよ」

意味ありげに聡太が言った。

あたしが全部言えたら？

来るのかな、そんな日が。あたしが変わる日が。

「大丈夫だよ」

両目を覆うあたしの耳に、はっきりと聡太の頷きが聞こえた。

「仲直り出来るよ」

最後に一筋こぼれてしまった涙が唇に染み込んだ。

「うん……」

しよっぱい。

大きく息を吸って、あたしは両手を離した。

そしてカーテンの開いた濃紺色の窓の外を見上げた。

三日休んで美香は学校に来た。

その間電話もメールもこなかったし、あたしも出来なかった。

もしかしたらあたしたちはこのまま終わるのかもしれない。そんな風にも思った。

美香がいなくなってもあたしはいつも通りに生活していけるだろ

う。友達は何にもいる。けどずっと使っていたものがなくなったような、物足りなさを感じていた。

でも三日後、美香はお昼休みにあたしの教室に来た。

見慣れた短いスカートにふんわりと下ろした髪、しっかりと書かれた眉に何度も重ねづけしてポリウムを出した長いまつげ。それを見た瞬間、あたしはひどく安心して泣きそうになってしまった。

「ごめんね、本当に」

中庭のベンチに二人で並んでお弁当を食べながら、美香が切り出した。

「透子に言わなきゃって思ってたんだけど、いつもタイミング逃しちゃって。だましてたみたいになっちゃって」

「ううん」膝の上のお弁当箱をあたしは見下ろした。

「あたしもごめん、美香の気持ち知らないで。無神経だった。本当にごめんね」

思い切って顔を上げると美香と目が合った。

「いいの。透子はあたしのこと心配してくれてたんだよね。ありがとう」

美香が素早く首を横に振った。

「まだうまく切り替えできないかもしれないけど、あたし大丈夫だから。ちゃんと学校にも来るし、また一緒にお弁当食べよう」

「うん、もちろんだよ」

あたしは笑って頷いた。

「よかった」

ぱつと美香が笑った。あたしの好きな笑顔で。

『待つてあげるのも思いやりなんじゃない？ 友達としての』

昨日の聡太の言葉で気付かされた。

もっと大人にならなきゃって。

きつとこれから同じようなことがあるかもしれない。

でもその時は黙って見守ってあげるんだ。

美香が本音を言いたくなかった時だけ、聞いてあげよう。大事に聞いてあげよう。

そんな包み込む優しさを、あたしは持ちたいと思う。

「また聞かせてね、透子のピアノ。あんたの音って、すごく優しくて好きなの」

はらはらと舞い散る桜の花びらを見上げながら、美香が言った。

見頃を過ぎて桜は終わりを迎えようとしていた。とめどない薄桃色の雨が中庭中に降り注ぐ。

「うん」

温かい春の風景にあたしは目を細めた。小さなひとひらがあたしのおはじきを一つ、そっと包み込んだ。

「お弁当食べよっか」

あたしたちは笑いあって、昼食に戻ろうとした。

その時。

どこからか、ピアノの音色が流れてきた。

【第十一楽章】 衝突（前書き）

あけましておめでとつごぞいます！
どうぞ今年も『春空カノン』を宜しくお願いいたします。

【第十一楽章】 衝突

聞こえたのはいつもあたしが昼休みに使っている準備室からだっ
た。

カノンだ。

とつさにお弁当箱をその場に置いて、あたしはベンチから立ち上
がった。

「待ってよ、透子」

美香が慌てて追ってくる。

振り返ることも忘れてあたしは裏校舎の入り口に走った。中に入
り階段を三階まで上がっていく。

もしかして。

三階の廊下についた途端、ピアノの音が止んだ。

「ちよつとお」と下から呼びかける美香の方を一瞥して「待ってて
と言いつ、あたしは一番奥の準備室へと向かう。そして少し歪んだ扉
を開いた。

「あ、咲ちゃん」

窓の方を向いて立っていた結理先輩が振り返った。

そしてその向こう、ピアノの前に 聡太が座っていた。

……なんで？

「咲ちゃん、ちょうどよかったー。いい人材を見つけたんだよー」

駆け寄って来た結理先輩があたしの腕を引っ張った。

棒立ちになつていた足をあたしは引かれるままに中に踏み入れた。

「さつき音楽室で昼寝してたらピアノの音がしたから、咲ちゃんかなーと思って来てみたの。そしたらこの子が弾いてたんだよ」

聡太のいるピアノの前で結理先輩は手を離れた。

「思わず声かけたら、咲ちゃんの弟じゃーん！ 入学式の挨拶で顔見てたからすぐわかったよ」

鍵盤の上から聡太が手を下ろす。あたしを上目遣いにちらっと見て、それから気まずそうに下を向いた。

「すごい上手だね、びっくりしちゃった。咲ちゃんみたいだったよ」
浮かれた結理先輩の声を耳元に、あたしは聡太をじっと見下ろした。

なんで？

なんでここにいるの？

心臓が不意打ちにバクバクいつてる。あたしを見るのが怖いのか、聡太は窓の方を向いてだまつていた。

「やめたって聞いたけど、まだ全然弾けるんだね。咲ちゃん、なんで教えてくれなかったの？」

あたしは愛想笑いを返す。でも声が出てこない。何を言っているかわからない。

「知ってたらすぐ勧誘したのに。ねえ弟くんは部活決めたの？」

結理先輩に聞かれて、聡太が「いや」と下向きがちに言った。「入るつもりないんで」

「なんでー？」

結理先輩がなんで、なんでと繰り返す。

いやだ。

あたしは急に怖くなった。

結理先輩が何を言いたいのかわかって。

「じゃあさ、うちの部に入らない？ 合唱部なんだけど、伴奏者も募集してるから」

やめてよ。

もうそこまですして。

目を瞑りたい気持ちで、あたしは二人の間に立っていた。

「いえ」と聡太が椅子から立ち上がる。ピアノの上にあつたビニール袋をとって丸めると、ズボンのポケットに押し込む。

「興味ないんで、部活って」

素っ気無い聡太に結理先輩がえーと声を上げた。

「咲ちゃんも一人増えた方が楽になるよね？ 合唱の方にも回れるし。弟なら色々相談も出来るだろうしさ」

刃物のように結理先輩の一言一言が突き刺さってくる。

どうしよう、頷かないと。落ち着くんのだ。

「弟くん、考えてみてくれない？ ぜひ！」

両手を合わせる結理先輩に、聡太が黙り込む。

聞きたくない、聞きたくない。

お願い、とらないで

取り戻そうと探していたメトロノームの音が、弾けとんだ。

「やめてよー！」

目の前の二人が驚いて、同時にあたしを見た。

頭の方から身体中の血の気が一気に引いた。あたしはそのまま準備室を飛び出していた。

聡太がピアノを始めると言った時、あたしはうれしかった。

一人で教室に行くのはずいぶんたっても慣れなくて緊張したしつまらなかったから。

だけど聡太はあたしを抜いてしまった。あたしがメヌエツトにてこずっている間に。

今でも忘れない、青いバイエル。レオポルト・モーツァルトのメヌエツト。

それからどこかで焦りは感じていたと思う。

あたしの好きなもの、全部とられちゃうんじゃないかって。聡太はすぐに何でも真似したがったから。

その後あたしは必死に練習して追いついた。

居場所がなくなる　ピアノまでとられてしまったら。

失敗した中学の合唱コンクール、あの時もあたしはその気持ちでいっぱいだったんだ。

結理先輩には放課後部活が始まる前に謝った。

「びっくりしたよお」と笑って許してくれたけど、あたしの剣幕には相当びっくりしたみたいで、「こっちも、ごめんね」と気を使わせてしまった。

今日は伴奏はさんざんだった。

もうとっくに完成したはずだったのに、得意とする箇所ではかき間違えて皆に迷惑をかけた。本当はあと三十分あったけど、体調が悪いと言って家に帰ってきてしまった。本当は嫌だったけど、他に

行くところもないから。

「あら、おかえり。今日は早いのね」

先に玄関に並んでいた聡太の靴を横目にローファーを脱ごうとしていると、音に気付いてママが台所から顔を出した。

開いたドアの中からごま油のにおいが漂ってくる。今夜は延期されていた野菜炒めの日だ。

「ただいま。うん、部活早く切り上げたの」

入り口に立つママにお弁当箱を渡す。そのまま階段を上がろうとしたら呼び止められた。

「ねえ、透子。あの子……聡太、どう？」

「どうって何が？」

うん、とママが思い悩んでいるように目線を下に向けた。

「まだ入学したただけど、うまくやってるのかなって。授業内容とか、どうなのかしら。そのへんあの子何か言ってる？」

なるほどね。

ママが何を心配しているのかあたしにはすぐにわかった。

“あんなレベルの低い学校に行つて、物足りないんじゃないかしら”

そういうことだ。

「ううん、何も聞いてないよ」

首を傾げてみせてあたしは階段を上がった。

ほんと、聡太ばかり。

ママはあたしに失望してるんだろうか。気遣って言葉を選ぼうとしてくれていたけど、それが逆にむなし。

やっぱりあたしはママの子じゃないんだって再認識させられる。

どんなにいい子でいたって変えられないんだって。

二階に上がって自分の部屋のドアを開ける。同時に隣の聡太の部屋の扉が開いた。

「透子、話があるんだけど」

ジーンズに黒の長袖のカットソー姿の聡太がおかえり、もなく切り出す。ずっと待ち構えてたみたいに。

「……なによ。早く言えば」

「ここじゃ言えない。ちよっとこっち来て」

自分の部屋の中を差す。だけど聞かなかつたふりをして自室に入ろうとすると、

「来いってば」

半ば強制的に引っ張られて部屋の中に押し込まれた。

「なによ!」

ドアがバンと音をたてて閉められる。入り口を塞ぐようにして立つ聡太があたしを睨んだ。

「話くらい出来ねえのかよ」

あきらかに怒っている声だった。

「……話なんてないもん」

肩に掛けた鞆の持ち手を握り締める。聡太があたしの近くに立った。

「うそつき。言いたいことあるんだろ。言えよ」

二十センチ近くある身長差は近付くほどに威圧的だ。びびりそうになったけど、あたしは避けずに持ちこたえた。

「うそつきはそつちでしょ」

「何がだよ」

「準備室にはもう来ないでって約束したでしょ。何で来たのよ」

そうすればあんなことにはならなかった。あたしはメトロノームの音を見失わなかった。

聡太がピアノなんか弾いていなければ、怖れていたことを聞かずに済んだのに。

「あんたもっ、ピアノはやめたって言ったじゃない。もうやらないって。なのにどうして弾いてたのよ！ 自慢したくなかったの？ あたしよりうまいって？」

「違うよ」ため息とともに聡太が吐き出した。

「オレ、合唱部に入るつもりなんてない。あの先輩にもそう言ったよ」

「当たり前よ」無意識に語調がきつくなる。目の前の利口そうな聡太の顔がにくたらしくて仕方なかった。

「聡太には無理よ。すぐ面倒くさいって言うじゃない。あんたは何でも出来るけど、忍耐力がないのよ」

「なんで言い切れんだよ。そんなのやってみないとわからないだろ」
「わかるよ！ てっぺんが見えると飽きちゃうのよ、あんたは。」

いつもそうじゃない。人の真似してなんでも手を出して、出来るとすぐにポイって。どうせまた同じことになるんだから、あたしはそんなヤツと一緒にやりたくないよ！」

「勝手に決めんな！」

すぐ横の勉強机の椅子を聡太が蹴飛ばした。あたしは怒鳴り返す。「だってそうじゃない！ あたしはもう嫌だよ、あんたにとられていくの！ このままじゃ何もなくなっちゃうじゃない！ いつだってあんたばかり！ みんなが誉めるのも、心配するのよ！」

ママだって、結理先輩だって。

誰もあたしを見ていない。傷ついているのに、気付いてもらえない。人はみんなうわべばかり見る。笑っていれば大丈夫なんだと判断されてしまう。目に見えるものだけがすべてじゃないのに。真実じゃないのに。

「オレはそんなつもりなんかじゃない！ なんでも人のせいにすんなよ！ そういうのひがみっていうんじゃないの？」

「悪かったわね！ どうせあたしは嫌な女だよ。頭も悪いしかわいくもないしお姉さんらしくもないし、出来のいいあんたとは違うよ！」

「やめるよ」

聡太が急に表情を歪めた。傷ついた顔　　だけどそれすら、あたしの劣等感を掻き立てた。

「とらないで」

泣きたくないのに、涙が目頭に滲んだ。

「あたし……もっと嫌な人間になっちゃう。もとに戻るつよ。昔みたい……」

『お姉ちゃん』と呼ばれていたあの頃に。そうでなければ、もう限界だ。

このままじゃ何かが違う。どんどん歯車がずれていくような気がする。

あたしのリズムは二度と戻ってこない。

「だって」

聡太の声が掠れた。震えているような息遣いだった。

「……オレは、透子の弟じゃ嫌なんだ」

【第十二楽章】 告白

「戸締り、よーし」

夕暮れ色の教室の窓を一つ一つ差しながら、田崎くんが大きく頷いた。

「戸締りじゃなくて暖房も見てよ。それがメインなんだから」

窓の下にある暖房装置のスイッチを覗き込んでファイルにチエツクを入れながら、あたしは最後の見回りの教室の中央で「黒板よーし、時計よーし」と調子に乗っている田崎くんに何度目かの忠告を發した。

「念のためだよ、念のため。いつ何が災害を引き起こすかなんてわかんないじゃん。暖房だけが危ないわけじゃない」

得意げに胸を張る『ゴール下の守護神』にあたしは苦笑を送る。そして腕の防災委員の腕章を取り外した。

「さて、ここで最後だね見回りは。ありがと、つきあってくれて」間に腕章を挟んでファイルを閉じる。

「いいえ」。一人で校舎全部見るのは大変だろ。しっかしだりーなあ、防災委員って」

田崎くんが両手を上に伸びをした。長い腕がぐつと持ち上がるといちだんと背が大きく見える。

あたしの就任した防災委員には、順番で『火気点検見回り』という仕事がある。校舎を回って暖房が切つてあるかのチェックや戸締りの確認を行うのだが、今週はうちのクラスが当番なのだ。

本当はもう一人委員がいるんだけど、今日はいにく風邪で欠席であたしは一人で見回ることになった。今年はまだ時々寒くて暖房を使っているけど、今日は温かかったからきつと使われていないだろう。ならすぐ終わるし一人でも大丈夫かな。

なんて思いながら教室を出て行く時に、田崎くんが「手伝うよ」と

声をかけてくれたのだった。

「あとは日誌をつけるだけだからもう大丈夫だよ。部活行きなよ」
「ここは三階の端、一年の教室だけど誰もいないからここでつけてしまおう。」

そう思ってたは窓際の椅子に座った。

「いんや、終わるまでいるよ」

二つ前の席に田崎くんが座った。あたしの方を向いて、背もたれに腕を乗せる。そして熟しすぎた柿の実のような夕焼けに染まるグラウンドの方を向いた。

「夕方つてさ、毎日色が違うよね」

「ん？」

日誌に日付を書き込んで、あたしは顔を上げた。

「鮮やかな時もあったり、薄い時もあったり。同じ空なのに、微妙に違うんだよね。生きものなんだなーって思う。人間みたいに」
しみじみと外を見ている田崎くんのオレンジ色の横顔につられて、あたしも横に顔を向けた。

黄昏の空は次々に変化していく。

金色からオレンジへ、オレンジから赤へ。夜の色になるまで、何度も試行錯誤を繰り返して。

「……そうだね。毎日少しずつ変わっていくのかも」

四月も半ばに差し掛かり、春の始まりを匂わせていた桜の花は散ってしまった。

地面に残っていた花びらも踏みにじられ、雨風にもまれているうちに消えてしまった。

もうどこにもあの幻想的な光景は残っていなくて、季節はどんどん春めいて暖かくなっても、鼻の奥がツンとなるようなせつなさだけが取り残されたように、ある。

聡太とはあの夜からほとんど話をしていない。

あの後声を聞きつけてママが血相変えてやってきて「何してんのよ」と叱られた。

理由を訊かれたけど聡太は答えなかった。あたしも「ちよつと意見が合わなかっただけ」と誤魔化して自分の部屋に戻った。

次の日からなんとなく気まづくなったけど、あたしは合唱部の練習が忙しくなったし聡太もまた予備校に行くと言い出して夜もいないことが多くなった。

学校でもすれ違うことなんてほとんどなくて、いつも同じ場所にも離れて暮らしてるみたいだった。

「咲ちゃん、この頃元気くない？」

日誌書きに戻りシャーペンを走らせていると、田崎くんが突然言った。

「へ？ そう？」

「うん、なんとなくだけど。よくため息ついてるし」

「え、ほんと？ そうかなあ。なに田崎くん、あたしのこと監視してんの？」

「そういうわけじゃないけどさあ。何かあったのかな」と思って

冗談のつもりだったのに、田崎くんは真顔だった。

「何かあるなら、聞くよ？」

あたしが、というよりも自分が悩みがあるような様子でそう言われて、思わず笑った。

「どうしたの、深刻な顔しちゃって。大丈夫だよあたし。もともとテンションだってそんな高い方じゃないしさあ。知ってるでしょ」

うーん、と田崎くんが曖昧な返事をして首をひねる。

「なんでもないよ、ほんとに」

気のせいだって、とあたしはくるり、とシャーペンを指の先でまわした。

昨日体育館への渡り廊下を歩いている聡太を見かけた。

クラスメートらしき男の子たちに囲まれて、楽しそうに笑っていた。ママの心配なんかよそに、すっかり溶け込んでいて。家にいる時よりも自然なその笑顔に、あたしは意識的に目を逸らした。

家にいる時の聡太は、いつも大人びた顔ばかりだった。あんな無邪気に笑うことなんて……最近はなかったような気がする。

家族の知らない聡太が、きっと学校や家以外の場所ではたくさんいるのだ。

これからきつと聡太はどんどん変わっていく。見かけも、中身も。

当たり前のことだけど、でもそれはあたしの知らないところで起こっていく気がして、……なんだか悲しくなった。

こうなったのはあたしのせい。わかっているのに。

「でも咲ちゃんは結構我慢する性格だよねえ」

「え？」

頬杖をつく田崎くんをあたしは見つめた。

「何も言わないから、俺も訊かないけどね。でもなんとなくわかるんだ、そういう時」

家でのあたしは相変わらずだ。

ママともうまくやってる。差し障りのない言葉を選んで。

ただ一つ変わったのは、ちくりとこたえる瞬間が多くなったこと。

聡太はあたしにもう手を差し伸べてはくれなくなったから。

「田崎くんはよく見てるね、人のこと」

あたしは微笑んだ。「友達思いだよね」

聡太はもうあたしを助けてはくれない。許してもくれないかもしれない。勝手に劣等感を抱いて叩きつけたあたしを。

「あのさあ……」 やつと寝癖の落ち着いた髪を田崎くんはがしがしとかき回した。

「咲ちゃんと弟は本当に血が繋がってないんだよね？」

「へ？ うん、そうだけど」

「そうだよね……だからか」

「なにが？」

一人でなにやら納得している田崎くんに、あたしは首を傾げた。

「あーごめん、変なこと聞いて。……あのさ、この間駅で行き合ったことあっただろ、弟くんと」

「うん」

「あの時さ、睨まれたんだよね」

「聡太に？」

「そう……はじめまして、って言った時かな」

駅での聡太はすぐ思い出せるほど最悪な態度だった。あたしはとっさに謝った。

「ご、ごめん。あの子ほんとに愛想なくて」

「いや〜いいんだよ別に。でもちよつと気になって」

なんて言うのかなあ、と田崎くんは天井を見上げる。

「なんつーか……ライバル視するような目だったんだよね。それ以上近付くな、みたいな」

「近付くな……って誰に？」

そう訊くと、「ん？ ううん」と田崎くんはとぼけて笑顔を作った。けどあたしは田崎くんが何を言いたいのかわかってしまった。

『オレは透子の弟じゃ嫌なんだ』

今もずっと胸にぶら下がっている聡太の言葉。どう誤魔化そうとしたり、分解して切り離そうとしてみたって、すぐにくっついて元に戻る。

あの時の崩れ落ちそうな聡太の表情が目の裏に焼きついて離れない。

「聡太は弟だよ。血が繋がってなくなつて」

一行しか書いてない日誌にあたしは戻る。

あとわずかでもあのまま時計の針が動いたら　あたしたちは完全にバランスを失っていただろう。後に続く言葉を聞いていたら。間違えた文字は消しゴムで消せるけど、一度起こったことは修正がきかない。

これでよかったんだ、そう思う。

今のままのほうがあたしたちには都合がいい。

「そっか　そうだよね」

田崎くんが椅子から立ち上がる。

「ならよかった。ずっと気になってさ」

色調を変えていく夕空を眺めながら、田崎くんが深呼吸をする。

その言い方があたしは気になった。

「　　」　　どうして、田崎くんが気にするの？　……そんなこと」

「だって」真剣な顔と目が合った。

ゴール下ではこんな様子で立っているのかとあたしがぼんやりと思っている、田崎くんはゆっくりと確かめるように言った。

「咲ちゃんが好きだから、気になるんだよ」

グラウンドからキーンという金属音が空に上がり、抜けていった。ボールを追いかける声が次々に重なる。

その声は紛れることなくはつきりと耳に届いた。夕日の色がちらちら映る二つの目はまっすぐにあたしを見ていて。

完全に止まってしまったシャーペンを持つ手をあたしは日誌の上を下ろした。

好き、と言った。田崎くんが。

どういうこと？　なんて聞き返さなくてもさすがにわかる。

なんだか映画のワンシーンを経験しているみたいだった。

「迷惑？」

あたしの顔を覗き込むように、田崎くんが長身を屈めた。

こくん、と喉が鳴った。

「びつくりした？ 一年の時からなんとなく気になって……でも三人のバランス崩すのは嫌だったし、それはそれで楽しかったから言わないでいいかな」と思ってたんだけど。でもこの間、部のやつらにからかわれただろ？ あの時、なんかうれいって思ってる自分に気付いたんだ。このままいられたらなーって」

いつもと同じ田崎くんが、いつもと同じように後頭部を搔く。何一つ変わらない彼が、いつもと違うことをあたしに告げる。

「好きなやつとか……いるの？」

一つの顔が過ぎる。
違う、どうして。

「今すぐに答えとか……くれなくてもいいーからさ。考えてみてくれないかな？ 俺とつきあうこと」

答えを促す沈黙が降りる。あたしは思わず下を向いて、誰が彫つたのかわからない机の古い傷を凝視する。

答えなきや、何か。

考えていって言うんだから「うん」でいいのに、なぜか出ない。ゆつくりとフェードアウトしていく夕方の光が、あたしを「さあ、さあ」と急きたてる。

静寂を破る鍵はその瞬間あたしが握っていた。あたしたち以外誰もいない教室は本当に静かだ。ぎっしりと並ぶ三十五個の机たちが、まるで耳を澄ましている観客みたいに思えた。

気を悪くしちゃう、ほら。

グラウンドの方を向いて、ポケットに手をつ込んで立つ田崎くんを座ったままあたしは見上げた。

そして口を開こうとした時、

頭上からスピーカーの音が聞こえてきた。

【第十三楽章】 動揺

放送で呼ばれたのはあたしの名前だった。

突然の呼び出しに何かまずいことでもしたかなあと思い悩みながら、「失礼します」と職員室の隣の事務室の扉を開けると、中にいた事務員さんがあたしを手招きした。

「咲宮さんね？ こっちこっち。お母さんから電話よ。携帯に出ないからこちらに掛けてきたって」

事務員さんの持つ白い受話器を見て、あたしはブレザーのポケットを押さえた。

そつだ、教室の机に置きっぱなしだったんだ。

「もしもし？」

なんだろうと思って受話器を耳に当てる。学校にまで連絡してくるなんて何かあったんだろうか。

するとすぐにママの、半泣きに近い余裕のない声が聞こえた。

『透子？ 透子？ もう！ なんで電話に出ないのよ！』

「ごめん、携帯机に置いたまま席はなれちゃって。どうしたのママ、そんなに焦って」

『もう大変なのよ。事故に遭ったのよ、聡太が！』

「え？」

事故？ 交通事故？

「事故って……どういこと？」

聞き慣れない言葉に、あたしは戸惑いを覚えて訊き返す。

『よくわかんないのよ！ さっき家に電話があって、帰り道で接触して……ああもう！ とにかく病院に運ばれたって』

「落ち着いてよママ」

スピーカーの音みたいにママの声が甲高く大きくなる。少し受話器を耳元から離して、あたしは叫ぶように言った。

『だからもう病院なの。やだ、駐車場いっぱいじゃない。早く出たよ！ 洋二さんも昨日から海外出張だし、なんでこんな』

「ねえどこの病院なの？ あたしも行く」

『あっ、あった！ あー透子ごめん、いったん切るわね！ ちょっと待ってて！』

「えっ、ママ！ ねえ、場所はどこななの！？」

ガタガタつという雑音がして、電話はそこで切れた。

「ママ？」

単調な切断音が耳元で響く。あたしは呆然とした。

聡太が……事故？ うそでしょう。

「どうしたの？ 大丈夫？」

メガネをかけた中年の事務員さんが、心配そうに訊く。

受話器を握る手に汗が滲んでくる。寒気と興奮が一緒にきたみたいに落ち着かなくなつて、足が震え出した。

病院で、まさか大怪我をしたんだろうか。それとも……

「ありがとうございます」とお礼を言つて電話を置くと、あたしは急いで事務室を出た。

廊下を走り出し、でもあてがないことに気付いて階段の手前で立ち止まる。

落ち着け、落ち着くんた。

どうすればいい？

病院にいかなきゃ。でもどこだかがわからない。

とにかくもう一度ママに連絡しなければいけない。あたしは二階の

教室に携帯を取りに向かった。

“ 事故に遭ったのよ、聡太が ”

体中がバクバクいつている。全身が心臓になったみたい。

さっきのは幻聴？ 本当にママの声だった？

冷静に考えてみようとするけれど、混乱が止まらない。

無人の教室に飛び込めば、ぼつんとただ一つ鞆が載っている机が目に入った。

鞆の横に所在なさげに転がっている携帯を開いてリダイヤルを押す。ママから入っていた三件の着信のうちの一つを選んで、発信した。

お願い、出て。

だけど何度コール音が鳴っても応答がない。

「お願い、ママ」

最悪の事態が目の前をかすめた。

そんなはずない、そんなことが起こるわけ。

やがて留守番電話のメッセージが流れ始めて、あたしは電話を切った。

「どうしよう……」

お父さんは昨日からタイに出張に行っていない。肝心のママは電話に出ない。他に何か病院を探す方法を考えなきゃ。

必死に頭を回転させる。すぐに浮かんだのは一つだけだった。

「電話帳だ」

近くの病院に片っ端から電話するのだ。昇降口の外の公衆電話ならきつと置いてあるだろう。

携帯をポケットに入れ鞆を肩にかけると、その方法を実行すべくあたしは席を離れた。

効率は悪いかもしれないけど、今はそれしか思いつかなかった。

「わっ！」

廊下に出た瞬間に黒い制服が目の前に飛び出してきて、ぶつかる寸前であたしは足を踏み止めた。同時に声が上がる。

「あ、咲ちゃん」

驚きの余韻で、田崎くんが目をぱちくりさせる。

「呼び出し、終わったん？ 遅いから持ってきたよ」

彼の手にあるものを見て、あたしはさっきまでどこにいたのかを思い出した。でもそれどころではなくて、差し出された巡回日誌を押し戻す。

「ごめん、緊急事態なの。机の上に置いておいて」

一分でもじっとしていたくなかった。他のことより今は出来ることをやらなきゃいけない気がした。

田崎くんの返事も待たないであたしは気持ちに押されるまま走り出した。

上履きのまま昇降口を出て、階段を駆け降りる。

日が沈んで影の支配する世界の中に、あたしは小さな明りが灯る電話ボックスを見つけた。普段は気にも留めない、むしろ時代遅れだなあなんて冷めた目で通り過ぎる場所が、今のあたしにはたった一つの救いだっただ。

「病院、病院でどこよ」

緑の公衆電話の下の台にある分厚い電話帳をバラバラとめくり出す。だけど文字が全然頭に入ってこない。早くしなきゃいけないのに、やみくもにページを弾くことしかできない。

聡太に何かあったら。

いなくなってしまうたら、どうしよう。

ひどいことを言ってしまった罰なのかもしれない。あたしのせいだ。

“やめるよ”

ケンカをした夜の、聡太の顔が浮かぶ。今にも泣き出しそうな、傷ついた顔をしていた。

どうしてあんたがそんな目をするの、って思った。痛いのはあたしの方なのに。

手がつれて、電話帳が足元に落ちた。

カノンくらい許してあげればよかったんだ。独り占めしようなんて思わないで。

拾おうとして屈んで、あたしはそのまま蹲った。

聡太は傷ついたりしないと思っていた。振り回されて我慢して傷つくのはあたしだけだって。

あたしは勝手に自分で積み重ねた荷物に耐え切れなくなって、手を離れた。それを聡太に投げつけて楽になろうとしたんだ。ぶつかれば痛い思いをすることも、怪我をするかもしれないこともすっかり忘れて。どんな時も聡太は、あたしをさりげなく助けてくれた。家でも、美香とのことも。いつも当たり前のように傍にいて、気付いた時には目の前に手が差し伸べられていた。

たくさんのもをもらってきたのに、あたしはそれを台無しにしてしまった。

泣いたって許されるわけじゃない。後悔したって過去に戻れるわけじゃない。

だけど今までどれだけ聡太の何気ないやさしさに救われていたのか、すれ違うようになってやっと思い知ったのだ。

いなくならないで、聡太。

涙を拭ってあたしはもう一度電話帳に手を伸ばす。

その時、ポケットの中で携帯が震えた。

聡太の運ばれたのは家から車で二十分くらいのところにある病院だった。

駅からタクシーを拾ってあたしが辿り着くと、ママが入り口でうろろろしていた。そしてあたしを見るなり抱きついてきたのだった。「ほんとにごめん、透子！ 私焦っちゃって、携帯車の中に放り出してきちゃったのよ」

慌てものママらしい。聡太の無事を確かめるのでいっぱいっばいで、落としたことにも気付かなかったんだろう。後になってあたしのことを思い出して急いで探しに行ったらしいけど、本当に聡太のことになるとママは盲目的に弱い。

聡太の怪我は右足の骨折と擦り傷で、命に別状はまったくなかった。

ベッドの上で足を吊られて「よ」と手を上げた聡太を見た瞬間、全身にどつと疲れが押し寄せてあたしは脱力しそうになった。

「避けようと思ったんだけど、ブレーキが間に合わなかった。まあ、仕方ないよね」

聡太が事故に遭ったのは家から塾に自転車に乗って行く途中だったらしい。見通しの悪い交差点がいくつかあって、いつもはたいして往来がないので気に留めずに通り過ぎようとしたところで、バイクと接触したのだという。

バイクの運転手も軽い怪我をしたらしく同じ病院で治療をしていたので、直接病室に謝りに来た。二十代後半くらいの真面目そうな男の人で、何度も深々と頭を下げている。

ママとその人が話している間、あたしは聡太と二人になった。

病室は二人部屋で、もう一つのベッドは空だった。

「……死んだのかと思った」

パイプ椅子に座って、あたしはがくりとうな垂れた。ここに来るまでの時間は早送りみたいに目まぐるしかった。

「勝手に殺すなよ……」

あたしの呟きを聞いて、ひでーと聡太が低く言った。

「だって事故って言ったから」

吊り下げられた二倍の大きさの足を見て、また力が抜ける。風船みたいにしばみきってぺっちゃんこになってしまいそうだった。

「……よかった、無事で」

どうしようかと思った、本気で。焦りすぎて自分のこともわからなくなりそうだった。

深呼吸がしたい。

だけど薬品のおいの混じる独特な病院の空気の中では、思い切り息を吸う気になれなかった。

「平気だよ」

体を動かそうとして「いてっ」と小さく舌打ちして、口をへの字に曲げてべ聡太はツドに沈んだ。

「簡単にいなくなったりしないから」

大怪我をしている十五歳とは思えないケロっとした声に、あたしは呆れそうになった。

でもこれが聡太だ。ちゃんと生きてる、いつもの。

今さらながら実感がわいて、色のない殺風景な病室の風景がぼわんと温かくなった。ありがとう、そう感謝したくなるくらいに。

「怪我してるくせに、かつこつけん」

「でも生きてるだろ。すぐ治るよ、こんなん」

いてえけど、と聡太は付け加えて、笑った。

「でももし死んでたら、オレ絶対化けて出てたよ。だって心残りがあるもん」

全然面白くない。

これだけ大量に心配した後では。

だけどあたしはなんだか笑ってしまった。安心したあまり。

いろんなものが込み上げてきてむせても、笑った。

それを見て聡太も笑い出す。久しぶりに見た、ありのままの笑顔だった。

そしてわかったんだ。

こつやって笑っているだけで、もう何もいらないうてくらい幸せになれること。

聡太の笑った顔が、あたしは好きだったんだっていうこと。

【第十四楽章】 君の声

聡太は一週間ほど入院して治療を受けることになった。

事故に遭った晩、聡太の担任の先生が病院に駆けつけてきた。その時学校にも連絡がいつていたのだとあたしは知った。少し落ち着いて確認していればもっと早く来れたかもしれないとあたしは気付いた。バカみたい。あんなに焦ってパニックした自分が恥かしい。

お父さんにもその夜に連絡をとった。びっくりして帰ってくると言ったらしいけれど、ただの骨折だから大丈夫よとママに言われ、予定通り来週に戻ってくることになった。

そしてお父さんに大丈夫、なんて言ったくせに案の定ママは病院に入り浸りだ。そのためあたしは最初の二日間は夜一人で過ごした。ママはちゃんと夕飯を用意していつてくれたけど、一人きりの食事は味気なかった。

相変わらず味の方は天気みたいに気まぐれだ。だけど、お冷やご飯で作ったかたまりだらけのチャーハンも、皆で食べている時はもう少しおいしく感じたように思えた。

“病院に行つてきます”

その一言が書かれたメモを眺めながら、あたしは終わらない食事を前にぼうつと台所に座っていた。

一人でいるのは好きはずだった。

気持ちが揺れたり騒いだりすることはないから。

だけどいざ一人きりになってみると、家という空間はやたら大きくて無機質で。自分が座っている小さな椅子の上だけが知っている場所みたいだった。

田崎くんにはまだ返事はしていない。

同じクラスの上に隣の席っていう微妙なシチュエーションはどうにもならず翌日は顔を合わせずらかったけど、田崎くんの態度はい

つもと変わらなかった。

一限の途中に来て、休み時間にパンを食べて、授業中に居眠りして、昼練に行く。その間に眠そうな目であたしに「ノート見せて」とか「ガム食べる?」とかいつも通りの会話を負ってくる。昨日あったことなんかすっかり忘れてしまったみたい。

あたしはそれで美香が前に言っていたコアラの脳みその大きさの話思い出して、本気で「まさか」と思いそうになった。

でもうやむやに出来ないことだけは、ちゃんとわかっていた。

聡太が入院して最初の二日間は部活があったので病院には行かなかった。

でもやっぱり心配になって、結理先輩に断って三日目に学校帰りに行くことにした。

最近のお昼はコンビニで買っていて、毎朝ママが千円をくれる。そのおつりが結構あまっていたので、バスでも行けるけど駅からタクシーを拾った。どうせママは今日も病院に行っているだろうから、帰りは一緒に車に乗せてもらえばいい。

聡太の病室に着くと、ママの姿はなかった。

サイドボードの上にはむいたリンゴの載った皿と、皮がくるまれたティッシュがあった。トイレにでも行ってるんだろう、きつと。

仰向けで聡太は眠っているみたいだった。

三日前と同じように吊り下げられた足が痛々しい。「おおい」と声をかけてみたけど、無反応だった。

なんだ、せっかく来たのに。

ベッドの脇にパイプ椅子を引き寄せてあたしは鞆を抱えて座った。カーテンが半分開いた窓辺には夕暮れが滲んでいる。オフホワイトの部屋は茜色に染まり温かかった。

夕焼けって優しく微笑んだ人の顔に似ている。心をほぐして癒してくれるような、大きな力があるみたい気がする。

目を閉じて、あたしは黄昏に浸っていた。

「透子」

突然呼ばれて、あたしは目を開けた。ベッドの上を見ると、聡太はいつの間にか顔を窓の方に向けていた。

「そのまま聞いて」

表情は見えない。眠った姿勢のまま、聡太は身動き一つしなかった。

「……ごめんね、透子」

ぼつり、聡太がこぼし始める。

「オレ、そんなつもりじゃなかったんだ。……とってやろうとか、勝とうとか。そうじゃなくて」

迷っているようにいつもの調子よりたどたどしく、小さな声だった。あたしはその言葉たちを言われた通り、黙って一つずつ拾っていく。

「透子の好きなものは全部、知りたかったんだ。好きになりたかった。だから何でも真似したくて。それで透子の近くにいられる、って思ってた。……それだけだったんだ、本当に」

病室のドア越しに子供の笑い声が聞こえた。「走らないの」というお母さんらしき声と「おねえちゃん待って」と追いかける声が通り過ぎていく。

「だけど、それが透子を追いつめてたんなら、オレはひどいことをしてたんだと思う」

ほんとにごめん、今まで。

まるで別れを告げるように、顔を背けたまま聡太が言った。

「あの時……わかってたはずなのに。中学の時、オレがピアノをやめた時。やつちやいけななんだって思った。透子に嫌な思いをさせるって」

やつちやいけない　聡太はそんな風に考えていたんだ。

合唱コンクールの後、聡太は急にピアノをやめた。

やっぱり、あれはわざとだったんだ。

違う、本当はあたしは知っていた。そうだったことに。けど見ないふりをしていた。だってほっとしたから。心底、ほっとしたから。

聡太よりうまく弾かなきゃ、上手にならなきゃ。そうやって頑張らなくてもよくなったから

「透子は言いたいことがうまく言えないから我慢してるんだって知ってたのに、オレ無神経だったよね」

違う、あんたのせいじゃないよ。

そう言ってあげなさいよ、ねえ。ちくちくと胸が痛んで、目の前がぼやける。あたしは膝の上の鞆を抱きしめた。

「傷つけようと思ったわけじゃない。いつだって、考えてたのは透子が昔みたいに笑えるようになればいいのについていうことだけで」

瞬きをしたらこぼれてしまう。あたしは瞼を閉じた。

「我慢しなくていいんだよ、透子。怖がらなくなったって。少しくらい嫌なこと言えよ。傷ついた時は傷ついた顔しろよ。別々の人間として生きてるんだから、ケンカしたりぶつかったりもするけど……そんなので壊れたりしないよ。家族も友達も、簡単になくなったりしない」

簡単に、なくなったり。

あたしは　そう、それが怖かったんだ。

失ってしまうのが。もう二度と手に入らないものだから。

変わらずにそこにあってほしいと願うあまり、傷つけないように殻を被って触らないようにした。

「……大丈夫だよ」

夕日の赤い色が目にしみる。あたしは必死で唇を噛み締めた。

「頑張れ、透子」

ありきたりなその言葉が、響いた。余韻を帯びて胸に染み込んで、せつかなかった。

口先だけの言い方なら、きっとこころはならない。他の人に言われなくても涙なんか出ない。

「頑張れ」

聡太だから。

聡太だから胸にくるんだ。

……ありがとう。

口は動かしたけど声にならなかった。

小さな花びらが一枚、積み上がったおはじきの上に舞い降りた。

電話に出ていたママが戻って来たのは、それから十分後くらいだった。

その時にはもう本当に聡太は眠っていて、ママとあたしはそのまま車で家に帰ることになった。

「あーおなかすいたわね。今チンするから」

長い髪をシュシュで一本に束ね、ママは花柄のエプロンをつけた。テーブルの上には、いつものメモと一緒にラップのかかった皿が置かれていた。炒め物らしきその料理をレンジに入れて温めのボタンを押し、ママは鍋のかかったコンロに火をつけた。

「あーあ、肩こった。病院でなんかダメよ、私。妙に緊張しちゃうのよね。やっぱり、あんまりお世話にはなりたくない場所だわ」

グラスを二つ用意して、あたしはペットボトルのお茶を注いだ。目元がじんじんする。涙はひいたけど、まだ疼いている感じだった。

「早く退院になるといいね」

「もう少しねー。でも家に帰って来ても松葉杖だもの、それもきつと大変よね。学校とかでは手伝ってあげてね」

冷蔵庫からいくつかラップのかかった小鉢や皿を取り出してママはテーブルに並べる。レンジからほうれん草とコーン、ソーセージの炒め物を出してみそ汁とごはんをよそり、あたしたちは席についた。

いただきます、と向かい合って声を合わせる。

「なんか二人って寂しいわね」

ママの顔色が沈む。

一人の時も思っただけで、『家族』っていう存在のウエイトはズいぶんと大きい物なのだ。たった一人いなくなっただけでも、慣れない広さの隙間があく。

ママとこうして二人だけで食事をとるのは初めてだった。それに対する違和感もあるのだろう。

「あの子がね」小鉢のラップを外してママはきんぴらをつつき始めた。

「透子と一緒に夕飯を食べるって言うのよ。一人じゃかわいそうだからって。まったく、時々大人みたいな言い方するのよね」

あたしは炒め物を皿に取る。バターのいい香りがふわっと漂った。

「あの子、ほんと透子、透子よね昔から。私の言うことには反発するくせに」

呆れたようにママが言う。がっかりしたような色を見た気がして、あたしは言い繕う。

「反抗期ってやつだよ。男の子ってそんな時期だよ」
「そうかなあ、とママがため息をつく。」

「あなたは聞き分けがいいのにな。わがママも言わないし、偉いわよほんと」

一粒一粒口に運んでいたコーンをあたしは歯で噛み潰した。

「……違うよ」

ほのかな甘さが口の中で溶けていった。

「ママが……好きだからだよ。だから迷惑かけたくないの」

いつもは喉でつかえる言葉。だけど今日なら言える気がしてあたしは声に乗せた。

「でも、時々後悔するんだ。本当のことが言えないと、楽しいと思えなくなつて、一人ぼっちになつたみたいで」

もつとあたしを見て。

心配して欲しい。

聡太だけじゃなくてあたしも。

雑草みたいに次々生えてくる欲求を踏みつけて見ないふりをしてきた。その中にある本当のあたしを見つけてくれないかと願いながら。

「……本当はね」

鼻の奥がツーンと痛くなる。けどあたしは勇気を引っ張り出した。

「あたし、酢豚が嫌いなの。いつもおいしいって言ってたけど、どんな味付けでも……好きじゃない。ほかに、嘘をついたことがある。ごめんね、ママ」

聡太みたいになれたら、どんなにいいか。

ずっとずっと、うらやましかった。ママと本音でぶつかることが出来て、心配されて。あたしもママに愛されたかったから。

でも同じようにしたら嫌われるんじゃないかって、それが怖くて黙り込むことを選んだ。

「ママが嫌がるから家でピアノ弾かないけど、本当はやりたい。あたしの好きなものも作ってほしい。帰りが遅いって怒られたり、テストが悪くて文句言われたり……もっと、もっと気にしてほしいの。あたしを見てほしいの」

あたしは夢中でしゃべっていた。じんじんする目元から涙が落ち始めても、手で拭いながら必死に。頑張れ、頑張れ、そう自分に言い聞かせながら。

びっくりした様子であたしを見ていたママが、箸を置いて俯いた。

「ごめんね、透子」

かすれた眩きを隠すように、ベージュのネイルを塗った指で顔を覆う。

「ダメな母親ね、私」

あたしは強く首を横に振った。

「そうよね……無理してたのよね。言いたいこと、ずっと我慢してたのよね。あたしが本当の母親じゃないから」

違うよ、ママは悪くない。

あたしが臆病だったんだもの。もっとぶつかっていればよかった

んだ、聡太の言う通り。

「透子はいつも笑ってるから……私安心しちゃってたの。大丈夫なんだって。ごめんね、気付いてあげられなくて。ごめんね」
顔を上げないママの肩は震えていた。泣いているママを見るのも初めてだった。

「ママは悪くない」拭っても拭っても、きりが無い涙だった。

「あたしが悪いの」

「だけど全部流さなきゃいけないと思った。

変わるために。あたしがあたしでいるために。」

『頑張れ、透子』

その一言があたしの背中を押してくれた。力をくれた。

聡太の言葉だから、信じられた。

「もっとわがまま言いなさいよ」

赤い目を上げてママが言った。

「文句も言いなさいよ」

椅子に掛けてあったタオルで両目を拭く。アイライナーが滲んだけど、やっぱりママはきれいだと思った。

「私はあるの、ママなんだから」

うん、と頷いた。

「これからは覚悟しなさいよ。何でも言っただから。厳しくするんだからね」

もう一度頷いた。それが精一杯で、もうその後はぐしゃぐしゃの顔で二人で泣いて、笑った。

たくさんのおはじきたちが、一つ一つ小さな音をたてて弾けていく。

割れるたびに、きらきらと粒子が舞って。

柔らかな風にさらわれて、消えていった。

【第十四楽章】 君の声（後書き）

次回最終話になります。

最後まで宜しくお願いします

【終章】 春空カノン

クレッシェンドは大きくなりすぎずになめらかに。

デクレッシェンドとつながって、きれいな音のグラデーションが出来るように。

気持ちは静かに、何も考えなくていい。

ほら、勝手に指先があたしの音色を奏でていく。

晴れた昼休みの準備室、窓をいっぱいにあけてカーテンを風に泳がせながらあたしはピアノに向かう大好きな時間。

春の日差しに目を細め、あたしは思い切り息を吸い込んだ。

もうすぐ五月がやってくる。

「ごめんなさい」と田崎くんに謝ったのは昨日のことだった。

躊躇はしなかった。考えなくても答えは出てしまったから。

田崎くんのこととは好きだけど、それは友達として。たぶんそれはいつまでたっても揺るがず変わらないと思った。

「じゃあ今まで通りでいよう」と田崎くんは言ってくれた。

そんな簡単にいくのかな？ 疑問が飛び出したけど、その日のうちに今まで通りに戻っていて、むしろあたしが戸惑うくらいだった。

無理せずマイペースで生きて、巻き込んだ人を幸福にさせる。田崎くんってそんな雰囲気を持つ人だと思う。

美香には何も言っていない。

「やっぱりね」と得意げに言われそうだから。

でも何年かたって思い出話になった頃に、そういえばと切り出せるかもしれない。

「あ、今間違えた」

邪魔を入れられて、あたしは鍵盤の上の手を止めた。
後ろを振り向いてじろりと睨む。

「黙って聞きなさいよ。けつとばすよ、その足
にや、と口の端を上げて聡太が笑う。

窓辺に首をもたれて椅子に座りながら、日溜まりに足を伸ばして
いる。してやったりと顔に書いてあるのが見えた気がした。

退院して、一昨日から聡太は学校に来ている。

もちろんまだ骨折は治るはずもなく、松葉杖についての登校だ。
ママが送り迎えをしている。

ママはとにかく世話を焼きたがって聡太に鬱陶しがられている。
それは相変わらずだけれど、ちょっとした変化もあった。

今朝学校に行く前にママが言った。

「今夜はシチューだから。早く帰ってきなさいよ」

それだけ、それだけのこと。

でもあたしにとっては宝物をもらった気分だった。

こつやってきつとこれからも。

ゆつくりでも確実に、あたしはあたしを包み込んでくれる世界と
一緒に生きて、その中からきらきら光る小さな瞬間を集めていくん
だろつ。

聡太との関係は変わらない。

仲のいい姉と弟。周りからはきつとそう見えるだろう。

それが時々物足りなかつたり、戸惑つたり。

ゆらゆらする淡い気持ちは、あたしを困らせた。

好きなのかもしれない、そうなのかもしれない。

でもまだ形のない風のように、不確かで弱くて。

メトロノームのゆつたりとしたリズムに寄り添って揺れている。

「透子、続き弾いて」

聡太の髪がそよ風にふわりと泳ぐ。

窓の外には眩しい緑の枝を広げる桜の木が見える。

桃色の春の雪を降らせていた大樹は、今はもうすっかり葉桜に変わった。

これから熱い夏の風に揺れ、秋には色づいた葉を落とし、木枯らしを受け止め、

そしてまた小さな蕾をつけるんだろう。

「何よ、自分で止めたくせに」

「いいから、いいから」

もう一度鍵盤にあたしは両手を乗せる。

メロディが流れればすぐに心は飛んでいく。春風に乗って。

あたしの大好きな曲。

「怪我が、治ったら」

後ろで聡太の声が聞こえた。

「もう一度透子とカノンが弾きたい」

緑のおいに乗せた風があたしたちの間を通り過ぎる。

「……いいよ」

自分の中にも。 やっとついた小さな蕾を呼び起こすように。

「あたしの隣は、あんたの場所だから」

果てしなく澄んだ春の青空へと、カノンの音色が吸い込まれていった。

【終章】 春空カノン（後書き）

ここまで読んでくださってどうもありがとうございました。
ありふれたお話になってしまいました。皆さんの心にささやかで
も優しい風を送ることが出来たなら、うれしく思います。
応援の声もありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2690c/>

春空カノン

2010年10月8日13時21分発行